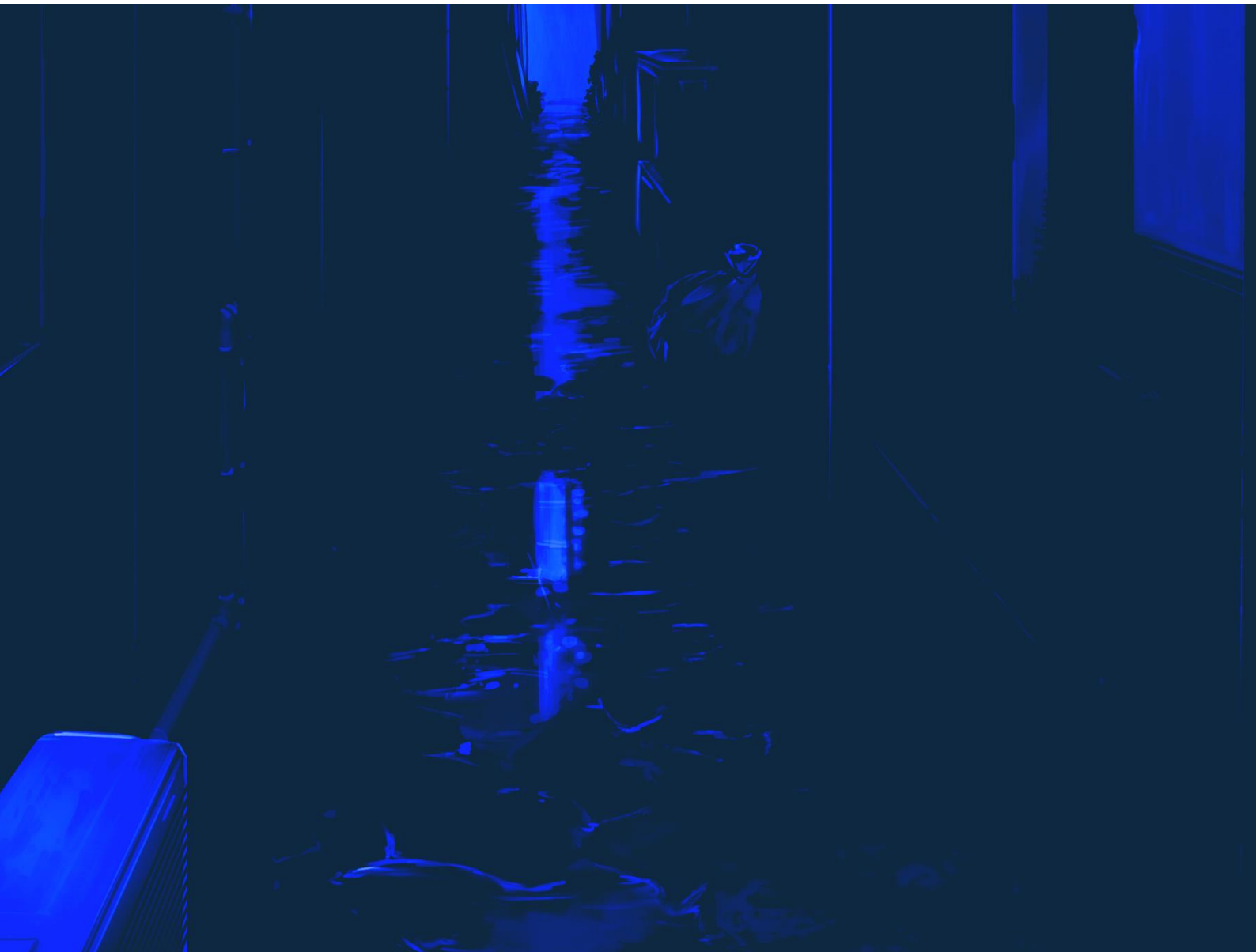


カオティックノベルズ



ご注意

本作は成人向け作品です。18歳未満の方の閲覧・購入を固く禁じます。

この物語はフィクションです。
実在の人物・団体・事件・地名・宗教等とは一切関係ありません。
また、作中における犯罪行為、反社会的行為、差別的表現、性的暴力を肯定・助長する意図はありません。

作中において性的な行為を行う登場人物は、全て成人です。

ご注意

目次

追放聖女はおうちに帰りたい……6
アザミ・インビジブル……42
サキュバス・シンドローム……62
ミライ・ビジョン……92
イミテーション・ラブ……128
山田さんは負けてない……164

追放聖女はおうちに帰りたい

一・聖女は追放される

テーブルに置かれた聖剣が、宿屋の午後の静寂を断ち切った。

ガチャリ、と金属の擦れる乾いた音。その響きは、この剣が背負う重さを一瞬で物語る。白銀の鞘には幾重もの傷が刻まれているのに、不思議と光を失っていない。柄頭の蒼い宝玉は窓明かりを吸い込み、冷ややかに輝いていた。

「ユースティア」

勇者アルトは低く名を呼んだ。その声音は湖面のように静かだったが、奥底には澱のような怒りが潜んでいる。

聖剣を挟み、アルトは対座する聖女ユースティアを静かに見据えていた。

部屋の隅では、赤髪の女騎士ロクサーナが腕を組み、険しい眼差しを二人へ向けている。小柄な魔導士少女メルは黙って俯き、長い前髪がその表情を隠していた。

仲間たちの沈黙が、かえって場の緊張を濃くしていく。

「この剣を――『聖剣ルミナスブレイヴ』を質屋に持ち込んだそうだね」

アルトの声は、刃のように冷たい。

「どういうつもりか。説明してくれないかな」

それでもユースティアは全く悪びれた様子を見せない。むしろ、「あ、バレたか」とでも言うように、ぺろりと舌を出した。

「あっ、あー、ごめんね？　いやー、どうしても欲しい限定魔導コスメがあったのよね。それにこの剣、鞘から抜けないの！　それで結局、値がつかなかったのよね。だからこれは未遂！　未遂なの！」

鼻歌でも歌い出しそうなほどの軽薄な口調に、アルトのこめかみに青筋がくっきりと浮かび上がった。アルトは一つ、深く息を吸い込むと、これまで溜め込んできた鬱憤を吐き出すように、ユースティアの悪行を一つ一つ、証拠を突きつけるように列挙していく。

「……先週。パーティーの活動資金から銀貨三十枚を抜き出し、街の賭博場で全てスったそうだね？」

「お金をこっそり増やそうと思ったの！　それにお金は使わなきゃ死んでるも同然よ！　私が経済を回してあげたのよ！」

「二日前の戦闘。二日酔いで詠唱を間違え、ロクサーナを灰にした件は？」

「誰にだってミスはあるでしょ！　結果的に生きてるんだからオールオッケー！　むしろ灰になって運びやすかったわよね？」

ロクサーナの拳がギリッと音を立てる。

「そして昨夜――」

その言葉に、俯いていたメルの肩がびくりと震え、隣に立つロクサーナの裾を小さく握りしめた。

「メルの部屋に忍び込もうとして、防衛魔法で撃退された件は……」

「あれは女の子同士のスキンシップ！　神聖な百合の間に男が挟まらないでよね！」

屁理屈とも呼べない理屈で、滔々（とうとう）と自らの正当性を主張するユースティア。そのあまりの反省のなさに、ロクサーナは忌々しげに舌打ちすると、壁に背を預けた。これ以上、聞くに堪えないという無言の抗議だった。

全ての言い訳を聞き終えたアルトは、もはや怒りを通り越し、深い、深いため息をついた。その目に宿るのは、汚物を見るかのような軽蔑の色だった。

「……もう、限界だ」

アルトは、僅かに残った情さえも断ち切るように、冷たく、はっきりと告げた。
「ユースティア。君をパーティーから追放する」
「え？」とユースティアの能天気な笑顔が固まる。
「……何それ、つまんない冗談。う、ウケるー」
乾いた笑い声を上げるが、アルトの目は本気だった。ロクサーナも、メルも、誰もが凍てついた視線でユースティアを見ている。冗談などではない。
ようやく事態の深刻さを理解し始めたユースティアの顔から、さっと血の気が引いていく。
「う、嘘でしょ？　冗談キツいって！　私がいなきゃ、邪悪な呪いとか解呪できないじゃん！　ね？　私たちは、今まで一緒に魔王討伐を目指して頑張ってきた、大切な仲間でしょ!?」
慌てて声色を甘く作り、テーブル越しにアルトへ縋りつこうとする。しかし、ア

ルトは氷のように冷たい表情で、ゆっくりと首を横に振った。

「確かに、君の聖女としての力……その身に宿す『女神の加護』の強さは本物だ。だからこそ、僕たちはこれまで君の素行に耐えてきた。だが、それももう終わりだ」

アルトは、部屋の隅で成り行きを見守っていた仲間たちの方へ視線を移す。

「君の代わりはもういる。僕の幼馴染のアンナが、王都の教会から正式に新たな聖女として任命されたんだ。彼女こそ、この「聖剣ルミナスブレイヴ」を真の姿で扱える、正真正銘の聖女だ」

愕然とユースティアの動きが止まる。裏切られた、という激情がその美しい顔を歪ませた。

アルトは、なけなしの情けとばかりに、銀貨が数枚入った革袋と、ユースティアの私物――飲みかけの高級な酒瓶や化粧品が詰め込まれた鞄を、投げ渡した。

「これを持って、二度と僕たちの前に現れないでくれ」

押し付けられた僅かな金と、自分の荷物。そして、かつての仲間たちの冷え切った視線。ユースティアは悔しさに唇を噛み締め、涙で視界を滲ませながらも、勝ち気な表情は崩さない。

「あ、あんたたちなんて、私がいなきゃすぐ全滅するんだから！　どこかのぼったくり寺院で灰になっちゃえ！　ばーかばーか！」

精一杯の捨て台詞を吐き、荷物をひったくると、ユースティアは乱暴に扉を開けて部屋を飛び出していった。

まだこの時点では、ユースティアの心は余裕と驕りで満ちていた。

（どうせすぐに泣きついてくるに決まってるわ）

自らの価値も、仲間たちの甘さも、信じて疑っていなかった。



二・聖女は破産する

ユースティアが向かった先は、勇者一行の拠点だった清潔な宿屋とは真逆の場所だった。入り組んだ路地の奥、鼻を突く安酒と人々の汗が混じり合った熱気が渦巻く、非合法の賭博場。追放された腹いせと、「有り金を増やしてアルトたちを見返してやる」というあまりに短絡的な思考が、ユースティアの足をここへ向かわせていた。

革袋からなけなしの銀貨をすべて取り出し、テーブルに叩きつける。

「全部よ！　これで勝負させなさい！」

その威勢の良さと、場違いなまでに整った顔立ちに、歴戦の博徒たちのいやらしい視線が突き刺さる。だが、ユースティアは気にも留めない。

最初の数回は、奇跡的な幸運がユースティアに味方した。銀貨は面白いように増

え、やがて目の前には、ちょっとした貴族の月収に匹敵するほどの銀貨の山が築かれていた。

（やっぱり私はツイてる！　流れが来てる！）

高揚感に身を任せ、有り金をさらに賭けていく。勝つたびに場の注目が集まるのが快感だった。周りの羨望と嫉妬の視線を浴びながら、ユースティアは賭場の女主人を呼びつけ、一番高い酒を場にいる全員に振る舞った。

「今日のお酒は、全てこの私ユースティア様のおごりよ！　あっはははは！」

湧き上がる歓声の中、ユースティアは高らかに笑う。

（見てなさいよアルト！　あんたたちが小銭を数えてる間に、私は王侯貴族みたいに豪遊してやるわ！）

増えたお金で豪邸を建て、可愛い女の子を侍らせる――そんな薔薇色の未来が、すぐそこにあるように思えた。

しかし、その夢は長くは続かない。

熱くなり、冷静な判断力を失った初心者は、狡猾なイカサマ師にとってこれ以上ない「カモ」でしかない。これまでの勝ち金の半分近くを賭けた大一番で、巧みな手口に嵌められた。

「ま、まだよ！　次で全部取り返してやるわ！」

一度転落しはじめると早いもので、そこからは、面白いように金を巻き上げられていく。あれよあれよという間に、勝利の女神はユースティアに背を向け、積み上がっていた金貨の山は跡形もなく消え去った。

「……は？」

あっという間に全財産を失い、茫然自失となるユースティア。

「い、今のはおかしいわ！　アンタ、イカサマしたでしょ!?」

そう叫んで相手の胸ぐらを掴もうとするが、証拠などあるはずもない。次の瞬間、屈強な用心棒に首根っこを掴まれ、ゴミのように店の外の汚れた路地へと放り出された。

＊

無一文。まさにその言葉が相応しい有様で、ユースティアはふらふらと夜の街を彷徨う。行き着いたのは、ユースティアがなけなしの金でヤケ酒を煽る時によく利用していた、安くて薄汚い酒場だった。

「マスター、いつもの。ツケでお願い」

カウンターに突っ伏そうとしたユースティアの耳に、聞き覚えのある声が届いた。

「おや、聖女様じゃないか。いつにも増して場末のドブネズミみたいな顔してるけど、何かあったのかい？」

隣の席で、斥候少女のリナがニヤニヤと笑いながらこちらを見ていた。リナは指先で弄んでいた硬い木の実を親指の爪で器用に割り、カリッという乾いた音を立てる。

リナの顔を見るなり、ユースティアの心の堰（せき）は決壊した。

「リナちゃ～ん、聞いてよぉ！　アルトたちがひどいの！」

「はいはい、またその泣き言かい」

リナは呆れた顔で聞き流しながら、割った木の実の中身を口に放り込み、殻を灰皿に捨てた。

「この私を！　パーティーから追い出して！　私が今までどれだけ貢献してきたと思ってるのよぉ！」

「ふーん、そりゃご愁傷様。でも、あんたの貢献って、主にこの辺の酒場の売り上げに対してでしょ」

「そんなことないもん！」

「ま、追い出されたんなら、さっさと自慢の実家にでも帰ればいいじゃないか。あんた、いいとこのお嬢様なんだろ？」

リナに痛いところを突かれ、ユースティアの言葉が詰まる。

「うっ……！　そ、それは……色々あんのよ！　大人の事情が！」

帰れるものなら、今すぐにでも帰りたい。でも、帰れない。勇者パーティーの一員として故郷の期待を一身に背負って送り出されたのだ。「素行不良で追い出されました」なんて、おめおめと帰れるわけがなかった。何より、あの優しかった父と母に、そんな無様な姿を見せたくなかった。

ユースティアは一度口ごもると、話を逸らすようにリナの手元に目をやった。

「……あんた、またそんな貧乏くさいカラカラ豆食べてるの？　よく飽きないわね」

「安いし、美味いし、腹持ちもいい。あたしらみたいな野良には、これが一番なんだよ」

リナはそう言うと、また一つ、カリッと豆を割った。

「はぁ……もうやだ……おうちに帰りたい……パパとママに会いたい……」

ユースティアは、子供のような泣き言を吐きながら、マスターのお情けで注いでもらった、タダ酒をあおった。

しばらく泣きじゃくった後、不意にユースティアの顔から涙が消えた。何か悪知恵を思いついたのだろう、その口元がニヤリと歪む。

「そうだ！　私、まだ聖女だもん！　聖職者の身分があれば、どこかの教会でぬく

ぬくと保護してもらえるはず！」

そのあまりに甘すぎる考えに、リナは眉をひそめた。

「まともな教会は、あんたの顔が割れてるから一発でアウトだろ。……あんたみたいなクズ聖職者を、事情も聞かずに受け入れるような場所があるとしたら……」

リナは顎をしゃくり、歓楽街の最も治安の悪い地区を指し示す。

「そこにある、行き場のない女を保護してるっていう教会くらいだね。ただ、あそこは黒い噂が絶えない。関わった女はみんな、魂を抜かれたみたいに虚ろになるか……そもそも帰ってこない、なんて話も聞く。関わらないのが身のためだよ」

その不穏な言葉に、背筋がぞくりと凍る。だが、それも一瞬。ユースティアはその危険ではなく金儲けの匂いを嗅ぎ取った。

「つまり、それだけヤバイ連中が出入りしてるってこと？　……それってその分、裏でガッポガポ儲かるってことじゃない！」

ユースティアの目が、金貨のようにギラリと輝く。
リナはやれやれとかぶりを振って、心底呆れたように溜息をこぼした。
「……アタイは忠告したからね。どうなっても知らないよ」
最後の呟きは、ユースティアの耳には届いていなかった。そもそもユースティアにとって、リナの忠告など激励の言葉と大差なかったのだ。
「ありがと、リナちゃん！　私、ビッグになってくる！」
意気揚々と噂の教会へと向かうユースティアを、リナは何も言わず見送った。やがて路地の闇にその姿が消えると、今度は溜息の代わりに、残った豆をカリッと割った。
「……本当に、目が離せない。首に鈴でもつけておきたいもんだね」

三．聖女は邪教に入信する

その教会は、およそ聖職者が住まう場所とは思えぬほどに、甘ったるく、腐臭にも似た香の匂いに満ちていた。礼拝堂のステンドグラスに描かれているのは女神の姿ではない。代わりに、艶めかしい肢体で人々を誘惑する悪魔や、悦楽に顔を歪める堕天使たちの姿が、毒々しい色彩で描かれていた。すれ違う数人のシスターたちは、皆一様に虚ろな瞳で、不気味なほど穏やかな笑みを浮かべている。

どう考えても邪教崇拝だった。

「ようこそ、迷える子羊よ」

祭壇の奥から現れたのは、人の良さそうな笑みを浮かべた初老の神父だった。

ポールと名乗った男は、ユースティアの姿を頭のてっぺんから爪先まで、じろりと眺め回した。品定めでもするかのような、粘りつくような視線。だが、それも一瞬のことで、すぐに温和な笑顔に戻る。

「それで、お嬢さん。何かお困りですかな？」

「ええ、とっても！」

ユースティアは少しも臆することなく、堂々と胸を張って要求を突きつけた。

「住むところと三食昼寝付き！　あと、美味しいお酒と、できれば可愛い女の子がいれば何でもやるわ！」

そのあまりにふてぶてしい態度に、ポールの口元が僅かに引きつる。だが、彼はすぐに人の良い笑みに戻ると、大きく両腕を広げてみせた。

「ええ、ええ、歓迎しますよ。ここでは皆が姉妹です。互いに助け合い、身も心も神に捧げましょう」

＊

その日の夜、ユースティアはけばけばしい装飾の一室に案内された。

「今宵から早速、あなたには奉仕を始めていただきます」

「奉仕？」

ユースティアはきょとんとして首を傾げた。

「なんだ、そんなこと。元いた教会でも毎日やってたわよ。お祈り？　それとも貧しい人への施し？　説法なら任せてちょうだい！　私の話術にかかれば、どんなケチな商人だって有り金を寄付したくなるわよ？」

自信満々に胸を張るユースティアを見て、ポールの口元が愉悦に歪んだ。

「ええ、ええ、その意気です。あなたのその類稀なる美貌と聖性で、救いを求める哀れな男たちの魂を慰めて差し上げるのですよ」

「ふふん、まかせなさい！」

ユースティアが得意げにそう言うと、ポールは満足げに頷き、静かに部屋を出ていった。扉が閉まる音を聞きながら、ユースティアは一人ごちる。

（どんな教会だって、やることは一緒ね。信者の悩みを聞いて、有り難い言葉の一つでもくれてやれば、みんな喜んでお金を差し出すんだから）

ユースティアは不遜な笑みを浮かべると、部屋の奥に置かれたやけに豪奢な長椅子にどっかりと腰を下ろし、足を組んで獲物を待ち構えた。

やがて、重い扉が開かれ、商人風の男が入ってくる。金鎖をジャラつかせた、脂ぎった小太りの男だった。

「あら、あなたが最初の迷える子羊さん？　さあ、そこに跪いて、あなたの罪を告白しなさいな」

芝居がかった仕草で促すと、商人は神妙に頷き、ゆっくりと跪いた。

（ふふん、ちょろいもんね）

ユースティアは心の中で舌を出し、どんなありがたい言葉でこの男を丸め込み、有り金を寄付させてやろうかと算段を立てる。

「聖女様……」

男は罪人のように俯き、厳かに口を開いた。

「わしは……どうしようもなく、俗な欲望という罪に苛まれております」

「ええ。正直に告白なさい。女神様はすべてをお聞き届けになりますから」

したり顔で頷くユースティア。

だが、男の次の言葉が、ユースティアの余裕を打ち砕いた。

「この、どうしようもなく熱く、硬くなってしまったわしの罪の根源……！」

男はそう言うと、顔を上げた。その目は欲望に濁りきっている。そして、跪いたまま、躊躇なく自身の衣服の帯に手をかけた。

カチャリ、と重そうな金のバックルが外れる音が、静かな部屋に響く。

「……え？　ちょっ……ま……」

ユースティアの言葉が止まる。男は構わずズボンを押し下げ、その内側から熱気を帯びた醜悪な肉塊をボロンと取り出した。

「さあ、聖女様。まずはこのわしの罪を、その聖なるお口で慰めてくだされ」

「……へ？」

ユースティアの思考が、完全に停止した。

目の前で起きていることが理解できない。理解したくない。

じわじわと恐怖が足元から這い上がってくる。声を出そうにも、喉がひきつって音にならない。

「い、嫌……いやぁあああっ！　へ、変態っ！　変態よおおおぉっ！」

ようやく悲鳴を絞り出したユースティアは反射的に扉へと駆け寄った。

だが、ドアノブはびくともしない。鍵がかけられているのだ。

「神父！　神父様、変態よ！　変態がいるの！　開けて！　開けてよ！　ここを開けてちょうだい!!」

ガン、ガン、と扉を叩き続けるが、外から返事はない。

絶望がユースティアの心を塗りつぶしていく。その時、背後からぬっと伸びてきた太い腕が、聖女の細い肩をガシリと掴んだ。

「ひいいぃっ！」

くるりと身体を反転させられ、背中が扉に押しつけられた。

「怖がることはありません、聖女様」

男は意外にも、穏やかな声で言った。

「これが、教会（ここ）での奉仕なのです。さあ、まずは手に取ってごらんなさい」

促されて、ユースティアは男の股間で立ち上がっているそれを直視した。

燭台と月明かりに照らされた赤黒い肉は、熱気を孕んで硬く反り返り。ユースティアの視線を受けて、より硬さを増しているようにさえ見えた。

「ふふ。怯えた顔も、実にそそりますがね……」

男はそう言うと、テーブルの上に、ずしりと重い金嚢（きんのう）を置いた。

ドン、という鈍い音と共に、袋の口から銀貨が数枚こぼれ落ちる。その中にひときわ鈍く輝く金貨が一枚混じっていた。

その光が、恐怖に固まっていた思考を無理やり現実に引き戻した。

（こ、この……汚い肉の塊に……触るだけで……これ全部……？）

プライドか、金銭欲か。究極の天秤が、ユースティアの中で激しく揺れ動く。

数秒の葛藤の末、天秤は、あまりにもあっけなく傾いていた。ユースティアにとって、お金はプライドよりも重いのだ。

ユースティアは意を決し、震える指先でその醜悪な塊に触れた。

そして、怖々と握り締めると――。

「ひっ……！」

ドクン、と生暖かい脈動が手のひらに伝わってくる。鉄のように硬いくせに、生き物みたいに震える感触に、思わず指を離しそうになった。皮膚の下で血管がどくどくと膨張しているのが分かり、生理的な吐き気が込み上げる。

「そう、優しく握り、上下に滑らせてごらんなさい」

男はユースティアの頭を、まるで飼い犬を褒めるように優しく撫でた。その意外な温もりが、強張っていた警戒心をわずかに解かす。穏やかな声色が、不思議な安心感を与えた。

（こ、こう……かしら？　これで、お金が手に入るなら……）

金欲で嫌悪を無理やり押しやり、言われるがままに手を上下させる。ぬるりとした湿り気が指に絡みつき、擦るたびに男の息が熱く漏れ出した。

「ああ、素晴らしい……！　あなたの手は、まるで天上の羽衣のようだ……」

頭上から降り注ぐ賞賛の言葉が、傷ついた自尊心を甘く慰めていく。いつしか、初めの嫌悪は薄れ、ただ肉棒を扱く作業に没頭しはじめた。手のひらが摩擦で熱を帯び、男の先端から透明な汁がにじみ出るのを見て、ユースティアの胸に背徳的な興奮が芽生える。

「次は、その聖なるお口で……」

その言葉に、再び体がこわばる。男の期待に濁った眼差しが、テーブルの金貨をちらりと見た。その無言の圧力に、ユースティアは抗えなかった。

扉に背をつけたまま、ずるずると膝を折った。冷たい石の床が膝頭に突き刺さる。おそるおそる顔を近づけると――むわりと立ち上る、チーズのような発酵臭と、獣のような生臭い熱気が鼻を刺す。

（く、臭い……！　こんなのを口に入れるなんて……でも、私のお金が……！）

正気の沙汰ではない。だが、男は急かさず、静かに待っている。

覚悟を決めて唇を押し開き、先端をそっと咥え込んだ。

「う……ぐ……」

未知の膨張感と、鼻に抜ける強烈な臭い、そして舌に広がる塩辛い味に、えずきそうになるのを必死に堪える。涙がにじむ。

そんなユースティアを見て、男は再び頭を撫で、囁く。

「ああ、そうです。舌を優しく這わせ、唇をすぼめてごらんなさい。そうすれば、わしの魂はもっと高みに……」

賞賛と細やかな指導。それに従い、舌を絡めて唇で締め付けると、男の息遣いが荒く乱れ、身体の芯まで熱気が伝わってきた。相手が喜んでいる。その事実が、ユースティアの嫌悪感を麻痺させ、代わりに、奇妙な奉仕の喜びと、下腹部を疼かせる熱を与えていく。

「ああ……もっと……もっと奥まで……！　あなたの聖なる喉で、わしの魂のすべてを受け止めてくだされ……っ！」

男の声はもう懇願ではなく、剥き出しの獣欲だった。

ユースティアは首をすくめる。これ以上は奉仕ではない。完全な服従だ。

その僅かな拒絶が、男の理性のタガを外した。

これまで優しかった手が、いきなり後頭部を鷲掴み、ぐいっと押し下げた。

「んぐっ……!?」

熱を孕んだ塊が喉の奥を抉る。

息が詰まり、視界が白く瞬く。涙が頬を伝い、鼻から漏れる嗚咽が泡立つ涎と混じって糸を引いた。

必死に男の腕を叩くが、まるで岩を叩いているようでびくともしない。

苦しい。息ができない。

――なのに。鼻から無理やり吸い込まれる空気に混じる、あの甘ったるい香のせいだろうか。下腹の奥が、じんじんと疼き始める。

喉奥を抉られるたびに、子宮の底に響くような痺れが走って――頭がふわふわと強制的に溶かされていく。

男はもうユースティアのことなど見ていない。ただ髪を掴み、排泄するように腰を振り立てるだけだ。

ごぷっ、ごぷっ、と粘膜を無理やり拡張する水音が、部屋に響き渡る。

「んんっ！　んぐぅううっ……！」

涙と涎で顔がぐちゃぐちゃになる。

喉の奥を何度も突き抜けられるたびに、胃が捩れ、なのに身体の芯は甘く疼いて、膝が勝手に内股に閉じていく。

（苦しい……のに、なにこれ……頭が、おかしくなる……ッ！）

「ぬおおおっ！　聖女様……！　わしの穢れを……全部、飲めっ！」

男が背を仰け反らせた瞬間――。

「んぐぅッ!?　ん、んっ……！」

熱い奔流が食道に、直接、ぶちまけられた。

どくん、どくん、と肉塊が脈打つたびに、ねばり気のある白濁が食道を灼きながら胃袋へと落ちていく。

ユースティアはただ、反射的に喉を鳴らし、ごくり、ごくりと飲み干すしかなかった。

男が離れる。

ぽとん、と抜けた塊から、糸を引く涎と残った精液が床に滴る。

「ふぅ……。素晴らしい……なんと締まりの良い喉だ」

男は満足げに吐息を漏らし、まだ痙攣するユースティアの頭を無造作に撫でた。

「けほっ、ごほっ……！　はぁ、はぁ……」

喉の奥に残る生臭さと、舌に絡みつく強烈な塩味。

ユースティアは床に手をつき、肩で息をしながら、ぼんやりと男を見上げた。

頭の中は真っ白で、思考がまとまらない。

ただ、口の端から零れた白濁が頬を伝う熱さだけが、妙に鮮明だった。

やがて、男が乱れた衣服を整える衣擦れの音が聞こえる。

「……素晴らしい奉仕でした。貴女に穢れを預けられたこと、これこそ女神様の導きですな。ははは」

捨て台詞のような賛辞を残し、重い扉がきしんで閉まる音が、遠くに響いた。



静寂が戻る。

部屋に残されたユースティアはただ、床に転がった一枚の金貨を、焦点の合わない瞳でぼんやりと見つめていた。

指先が、まだ微かに震えている。

舌に残る生臭さ。

体の芯が、まだじんじんと熱い。

背徳的な高揚感が、金貨の輝きによって肯定されていく。

ユースティアの唇の端が、無意識に吊り上がった。

アザミ・インビジブル

一・イントロダクション

アザミ・シノウラは、特殊人材支援統括機関――通称：特人（とくじん）に所属する【Ａ級異能者】である。

保有する異能は【完全隠蔽（インビジブル）】。視覚・聴覚・嗅覚など、あらゆる感覚から自らの存在を消し去る最強のステルス能力だ。

本来は極めて高い集中力を要求されるその能力を、アザミは生まれ持った才能と努力によって呼吸するように使いこなし、数々の潜入任務を完璧に遂行してきた。



LE）

を含む全感覚からの存在抹消。

術式だが、対象者は無意識下での常時発動が可能。

に限定。外部からの予期せぬ物理的接触、または過度

著しく低下する（■■■による実験にて実証済み）。

能力・行動評価

- **任務遂行能力：** 潜入能力においては組織内でも代替不能なリソースと定義する
- **心理傾向：** 自己愛が強く、自身の能力への絶対的過信が顕著。同ランク異能者に
  し強い敵対心と承認欲求を抱いており、これが独断専行を招くリスクとなってい
- **管理上の注意：** 単独行動を好むため、協調性を要する任務には不適格。

3．運用上の警告

本対象者は能力への過信から、異能の限界点を見誤る傾向にある。特に「接触による発
のリスクについて再教育が必要。能力の解除は対象者の意識喪失時、または強い精神的
を受けた際に自動的に行われる。

4．特別管理プロトコル

- 精神背景と環境: 能力発現以降の環境要因に起因し、深刻な対人不信状態にあ
  外面を取り繕う行動は、自己の脆弱性を隠匿するための防衛機制と推測される
- 管理戦略: 不安定な精神状態が異能出力の維持に寄与している可能性が高いた
  精神的諸問題の解決は「意図的に保留」とする。
- 社会適応: 協調性の欠如は任務上の支障となるため、現在は段階的な集団生活
  プログラムを実施中である。

二・イージーゲーム

森の奥深く、オークたちの前哨基地。アザミは、まるで散歩でもするかのような気軽さで、その敷居をまたいだ。

（――簡単ね。こんな任務、退屈しのぎにもならないわ）

異能【完全隠蔽（インビジブル）】を発動させたアザミの姿は、誰にも認識できない。オークたちがすぐ側を通り過ぎていくが、誰もアザミの存在に気づく様子は全くない。

あまりの容易さに、アザミの口元に、自然と笑みが浮かぶ。あとはこのまま、オークたちの首領を探し出して毒殺すれば終わり。午後には寮に帰れるだろう。

これが他の連中だったら、今頃どうなっていたことか。そんな想像と共に、同僚たちの顔が脳裏に浮かび、アザミは無意識に奥歯を噛み締めていた。

（――でも、それじゃあ、つまらないわね）

アザミの中にちょっとした悪戯心が芽生える。すぐ側を歩く一匹のオークの、その太い鼻先を、指先でくすぐるように触れてみた。オークは訝しげに鼻をぴくぴくと動かすが、少女の姿を捉えることはできない。

「こ、この豚野郎め、見えないでしょう？」

アザミは口汚く罵ってから、くすくすと笑い、さらに大胆になる。

【完全隠蔽】は、触れている相手には効果が弱まる弱点を持つ。だが、一瞬触れる程度なら、愚鈍なオークに気づかれるはずもない。

案の定、互いを仕業だと勘違いしたオーク同士が言い合いをはじめ、すぐに喧嘩になり、果ては殺し合いに発展する。

アザミは笑いをこらえるのに必死だった。

（馬鹿な家畜。言葉を話しているつもりらしいけど、結局は獣じゃない）

アザミにとって、オークは駆除対象以上のなにかではなかった。

魔物の中でも下等で、繁殖力だけが取り柄の害獣。人里を荒らし、女を攫い、仔を増やす。ただそれだけの生き物。

そんな相手に対して、A級異能者のアザミが緊張する道理がない。たとえこの基地に百匹のオークがいたとしても、アザミには指一本触れることができないのだ。

（――この力さえあれば、アタシは誰にも負けない）

その確信は、祈りにも似ていた。

見えない。触れない。捉えられない。それがアザミの全てだった。この力がアタシを見つけてくれた。価値をくれた。だから絶対に手放さない。

（さて、それじゃお仕事を済ませましょうか）

アザミは殺し合いの末に息絶えた二匹のオークの骸を一瞥し、何の感慨も抱かずに歩き出した。

ふと、オークたちがたむろしている場所から少し離れたところで、一匹のオーク

がじっと下を向いて動かないことに、アザミは気づいた。

（なんだ、あれ……？）

警戒しながら近づくと、ふごっ、ふごっ、という荒い息遣いが聞こえてきた。その手には、人間のものと思しき一冊のくたびれた雑誌が握られている。表紙には、あどけない顔立ちの少女が、年齢に不釣り合いな際どい水着姿でこちらに微笑みかけていた。

ページをめくる指とは逆の手が、ごわごわとした腰布の隆起をいやらしく揉んでいる。そこからは、すでに猛烈な勃起を遂げた醜悪な肉竿がはみ出していた。雑誌の少女に欲情し、自慰に耽っているのは明らかだった。

「キモッ……」

アザミは無意識に呟き、さっさとその場を去ろうとオークの前を横切った。ミディアムショートの髪がふわりと風に揺れ、オークの豚鼻を僅かにくすぐる。

その瞬間だった。

「――ッ!?」

突如、がしりと屈強な腕が、アザミの肩を掴んだ。異能が破られた!?　そんなはずはない。視覚でも、聴覚でもない。ならば、一体なぜ――

オークは半ば本能で動いていた。視覚でも、聴覚でもない。そのたくましい鼻腔が、本来嗅ぎ取ることができない匂いを、しかし、嗅ぎ取っていた。

男を知らない処女から薫り立つ、少女特有の甘酸っぱい匂い。その香りに、オークの本能が、下半身が、訴えかける。極上の獲物が、ここにいると。

「きゃっ……！」

肩を掴む万力のような力。アザミは掴まれた肩から能力が弱まるのを感じ、咄嗟に悲鳴を上げた。

その声で、オークはメスの存在を確信する。見えないながらも、アザミの華奢な

体を組み敷き、その両脚を大きく開かせた。

「やっ、やめて……離せ、この豚……っ！」

アザミは必死に抵抗するが、オークの圧倒的な筋力と、触れられている部分から弱まっていく能力の前では、赤子同然だった。

オークは、アザミの抵抗など意にも介さず、その湿った鼻先で見えない獲物の急所を探り当てる。そして、己の醜くも猛々しく勃起した肉竿を、その小さな入り口にあてがった。

「ひっ……！　あ、ああ……！」

ズブリ、と。経験のない裂け目に、熱く硬い異物が、無理やり抉じ開けられていく。

「い、いたぃいいいっ!!」

鼓膜を突き破るような絶叫と共に、アザミの処女膜が、無惨に引き裂かれた。

それでもなお、A級異能者としてのプライドが、アザミに【完全隠蔽】を不完全ながら維持させていた。まだ姿は見えない。だが、オークの肉竿を伝い、その根元から滴り落ちる破瓜の血は、隠しようもなく、点々と地面を汚していった。

三・ハードファック

オークは獲物の絶叫を聞くと満足げに喉を鳴らし、獣じみた腰使いでさらに深く抉り始めた。

「あぐっ！　ぐぅううっ……！　やめろ、豚っ！　変態！　変態野郎ぉっ！」

獣の熱が子宮口をゴリゴリと押し上げる。引き裂かれるような痛みと、媚薬を含んだ先走りでぬるぬると滑る異物感。アザミは涙と涎で顔をぐちゃぐちゃにしながら必死に罵倒するが、声はすでに震えていた。

周囲のオークたちは仲間が透明な何かと交尾している姿に首を傾げるだけ。誰も助けに来ない。誰も気づかない。ただオークの汗と自分の冷や汗が混じり、肌がぬるりと滑るおぞましい感触だけが増していく。

「あっ、あぁんっ……！　くそ、好き勝手して……っ！」

アザミはオークの胸板を拳で殴りつけた。

だが、全力で叩いたはずの拳は、分厚い脂肪と筋肉の壁に吸い込まれ、何の反応も返さない。爪を立てても、噛みついても、オークは動きを止めるどころか、鬱陶しそうに鼻を鳴らすだけだった。

そうこうしている内に、片腕を押さえつけられ、体重で地面に縫い止められる。

「んあっ！」

肉棒が角度を変えて膣壁を擦り、アザミはあられもない声をあげさせられた。

（こんな、畜生相手に、アタシが……！）

だが、どれだけ力を込めても、アザミの細腕ではもうどうにもならない。

ただ、オークの律動に揺さぶられ、都合の良い穴として使われるしかない。

（くそっ！　どうにかして……）

なおも脱出手段を模索するアザミに構わず、オークは抽挿を続ける。

こつん、こつんと、腰を打ち込まれるたびに、鎖骨の下で何か小さく硬いものが皮膚を叩く。思考をかき乱すその感触を鬱陶しく思いながらも、アザミはふと違和感に気がついた。

（……何だっけ、これ……？）

制服の裏地に縫い込まれたそれが何か、アザミはようやく思い出した。

（そうだ……通信装置！　これを使えば……！）

スイッチを押せば、本部に繋がる。救援が来る。この地獄は終わる。

震える指が、布越しに装置の輪郭をなぞった。

今なら押せる。たった一押し。それだけで、助かる。

（……でも）

救援が来れば、この姿を見られる。

オークに組み敷かれ、脚を開かされ、獣の肉棒を咥え込んだ姿を。

脳裏に同じＡ級異能者たちの嘲る顔が浮かんだ。
実際に口に出して馬鹿にされたことなどない。だが、アザミにはわかった。
彼女らの視線が、表情が雄弁に語りかけてくるのだ。
「逃げ隠れしか能がないできそこない」だと、「Ａ級に相応しくない臆病者」だと。
その彼女らに、この姿を見られることだけはあってはならない。
（あんなやつらに、馬鹿にされるくらいなら……！）
指が、装置から離れた。
アザミは自分の意志で、唯一の脱出手段を捨てた。
地獄を終わらせる権利を、プライドと引き換えに捨てたのだ。
（……自分でどうにかしてやる……！）
能力は維持できている。接触しているこいつ以外には気づかれていない。
なら――射精の瞬間だ。雄が一番無防備になるというその一瞬を狙う。

それしかなかった。

だが、それは同時に、この獣が果てるまで耐え続けるということでもあった。

「ぐっ……ぅう……！」

一突きごとに、媚薬を含んだ先走りが膣壁に塗り込まれていく。最初は激痛でしかなかった獣の形が、少しずつ、秘肉に馴染んでいく。

「あっ……ぅ、う……」

歯を食いしばる。だが、噛み締めた奥歯の隙間から、抑えきれない吐息が漏れた。

（まだ……っ）

一分が十分に感じられた。

オークは飽きもせず腰を振り続ける。その度に、少女の身体は少しずつ慣らされていく。肉壁が獣の輪郭を覚え、勝手にぎゅうぎゅうと締め付けてしまう。

（まだ、来ないの……っ）

十分が一時間に感じられた。

いつからか、痛みの底に、別の何かが混じり始めていた。拒絶しているはずの身体の奥から、じわりじわりと甘い熱が這い上がってくる。

「うあっ、あっあっ、こんなの……！」

アザミは唇を噛み締め、その熱を殺そうとした。だが、オークが深く抉り込むたびに口元が緩み、堪えきれない声が漏れる。

耐えれば耐えるほど、肉体は獣との交尾を受け入れていく。

自分の選択が、自分を蝕んでいた。

（来て……っ、もう来てよ……！）

もはや、何を待っているのかさえ曖昧になりかけた頃。

やがて、オークの息が変わった。突き上げが乱暴さを増し、膨張した肉竿が膣奥をゴリゴリと抉り、子宮口をこじ開けるように押し上げてくる。

（あ……く、来る。もうすぐ……！）

だが同時に、疲弊しきった肉体が裏切っていた。

射精の予兆にゾクゾクと背筋に痺れが走る。

媚薬に侵された膣壁が収縮し、獣の形にぴったりと吸いつき絞りあげる。

子宮は拍動に合わせてジンジンと疼き、子宮口と鈴口が、ぐっちゅぐっちゅと卑猥なディープキスを何度も交わす。

（ち、違う……！　アタシまで……！　耐えろ、耐えろって……！）

次の瞬間――。

「グオオオッ！」

オークが大きく仰け反り、膣の最奥に灼熱の奔流を叩きつけた。

「ひぃいっ!?　あ、ぁあああああぁん……!!」

どくん、どくんと脈打つたびに、濃厚な精液が膣奥に吐き出されていく。

その熱く、粘り気がある特濃の媚薬精液を、子宮が貪るように吸い上げていく。
一滴も零すまいと収縮を繰り返し、獣の精を根こそぎ搾り取ろうとする。
アザミの意志とは無関係に、身体だけがオークの雌として完成していた。
「いやっ……！　やだ、やだぁあっ……！　入ってくる、入ってくるのぉっ……！」
経験したことのない絶頂が全身を貫き、背筋が弓なりに反る。
アザミは解放された両腕を無意識にオークの首に回し、獣にしがみつきながら、
自分でも信じられないほど下品な声を上げてイキ果てた。
「んひぃいっ！　イく、イくぅううううっ……!!」
思考が真っ白に溶ける。そして――。
【完全隠蔽（インビジブル）】が解除された。
そこに現れたのは、涙と涎と精液にまみれた、壊れた美少女の姿。
「グオオォッ!?」

犯していたオークが驚愕し、一度動きを止めた。
だがすぐに状況を理解し、獣じみた咆哮を上げながら、ぐったりしたアザミの体を高々と掲げる。
戦利品のように見せびらかされたアザミの無様な姿――。
制服は破れ、乳房は露わになり、大きく開かれた脚の間からは、赤く腫れ上がった秘裂がぴくぴくと痙攣し、どろり、どろりと白濁が糸を引いて溢れ続けている。
アヘ顔で舌をだらしなく垂らしたまま、時折びくんと跳ねるその姿は、完全に敗北した雌そのものだった。
一瞬の静寂。そして――。
「「グォオオオオオオオオオオオオオッ!!」」
興奮で目を血走らせたオークたちが、一斉にアザミに群がった。
地獄の輪姦が、はじまろうとしていた。



サキュバス・シンドローム

一・甘い香り

ピ、と無機質な電子音を立てて、テレビの電源を落とす。

画面の向こうで繰り返される言葉は、もう聞き飽きたものばかりだった。【淫魔症（いんましょう）】、新規感染者数、致死率一〇〇パーセント、そして【緊急避難措置】――。

テレビを消した部屋は静まり返り、鉛のように重い空気だけが残った。ふと視線をさまよわせると、カーテンの隙間から差し込む西日が、床に舞う埃を金色に照らしていた。外は、まるで世界が終わってしまったかのように静かだった。

不要不急の外出自粛。政府がそう呼びかけてから、もうどれくらい経っただろ

う。人々は家に籠り、隣人すら感染者ではないかと疑うようになった。誰もが距離を取り、視線さえ合わせようとはしない。まるで、互いが互いのための、透明な壁をまとって歩いているかのようだ。

私が今、この息もできないような世界で、それでも息をしている理由。

それが、この部屋の奥、固く閉ざされたドアの向こうにいる。

「……ミオ」

妹の名前をそっと呟く。

消毒液を染み込ませた布でドアノブを丁寧に拭き上げた。気休めにしかならないと分かっていても、そうせずにはいられなかった。このドアが、日常と非日常を分ける境界線。あの子を守るための、最後の壁だった。

冷蔵庫を開けると、ひんやりとした空気が頬を撫でる。その奥に、今日の昼間、なけなしの勇気を振り絞って買いに行ったものがあった。

防護マスクを二重にし、誰とも視線を合わせないように俯いて、最短距離で往復したコンビニ。レジの店員ですら、私を汚いものでも見るような目をしていた。

そんな思いをしてまで手に入れたかったもの。ミオが好きだった、ストロベリーチョコレートのアイスクリーム。カップの表面についた霜を、指先でそっと撫でる。少しでも、あの子が喜んでくれればいい。熱に浮かされた身体が、ほんの少しでも楽になればいい。そんな、藁にもすがるような思いで、私はそれを手に取った。

「ミオ、入るよ」

小さな声で呼びかけ、鍵を開けてゆっくりとドアを引く。途端に、むわりと甘い香りが鼻をついた。熟れすぎた果物のような、蜜のような、一度嗅いだら忘れられないほど濃密な香り。

――淫魔症の患者が放つ、特有の匂い。

息を詰め、部屋の中へと一歩、足を踏み入れた。

薄暗い部屋の空気は、熱気とあの甘い香りで満ちていた。まるで、シロップの中を歩いているかのように、肌にまとわりつく重たい空気だ。遮光カーテンが引かれ、昼間だというのに夜のようだ。ベッドの上で、ミオが苦しそうに息をしていた。シーツは汗で湿り、華奢な肩が小さく上下している。

「ミオ……？　起きてる？」

そっとベッドに近づく。私の声に、ミオの瞼が震え、ゆっくりと持ち上がった。熱に潤んだ虚ろな瞳が、私を捉える。

「……おねえ、ちゃん……？」

「うん。……見て。アイス、買ってきたよ」

隠していたアイスクリームのカップを、ミオの目の前に差し出す。

すると、それまで虚ろだったミオの瞳がぱっと輝きを放った。

ああ、そうだ。それは病気になる前の、私のよく知る妹の顔だった。

「アイス……？　ほんと……？　ストロベリーチョコ……」
「そうだよ。好きでしょ？」
「うん……！」
子供のように頷くミオの姿に、胸が熱くなる。ああ、よかった。少しでも、元気になってくれた。私はベッドサイドに腰掛け、プラスチックの蓋を剥がしてスプーンを手に取った。
「ほら、食べさせてあげる。あーんして？」
そう言って、ピンクと茶色の混じったクリームをすくい、ミオの口元へ運ぶ。けれど、スプーンがその唇に触れようとした、まさにその刹那、ミオの顔から表情が抜け落ちた。先程までの無邪気な輝きは嘘のように消え、その瞳が絶望的な恐怖に見開かれていく。
「だめっ！」

かすれた叫び声と共に、ミオはベッドの上を転がるように後ずさった。

「来ないで！　近づかないで！　うつっちゃうから……！」

パシッ、と乾いた音が響く。ミオが必死に振り払った手が、私の手首に当たった。スプーンが宙を舞い、アイスのカップが手から滑り落ちる。カーペットの上に、べちゃり、と汚い染みとなって広がった。

「あっち行って！　お願いだから、もう入ってこないで……！」

壁際に蹲り、頭を抱えて嗚咽を漏らすミオ。その言葉に何も返せず、ただ床に広がった無残な染みを見つめる。そこから、全く別の光景が灼きつくように蘇った。

――去年の夏。じりじりとアスファルトを焦がす太陽の下、公園のベンチで、二人で一つのアイスを分け合って食べた。同じ、ストロベリーチョコレートの味。

『あ、お姉ちゃんずるい！　そっちの大きい方食べたでしょ！』

『もう、ミオこそ食いしん坊なんだから。ほら、口の周りがチョコだらけ』

たわいないことで笑い合った声。けたたましい蝉の声。溶けたアイスの、甘い味。

――味は匂いへ。情景は溶けて現実が顔を出す。

目の前には、公園のベンチも、賑やかな蝉の声もない。ただ、ベッドの隅で蹲って自分を責め続ける妹と、カーペットに染み付いた、幸せだったはずの思い出の残骸があるだけだ。私は部屋を出て、濡らした雑巾を手に戻ってきた。ごめんね、とも、大丈夫だよ、とも言えなかった。

私は黙ってそれを拭き取る。カーペットに染みは消えても、妹の震えは止まらない。もう、私にはあの子にかけるべき言葉も、してやれることも、何も思いつかなかった。あの甘い味は、この部屋ではもう、拭い去るべき汚れでしかないのだ。

その、無力感に打ちひしがれた、まさにその時だった。

ピンポーン、と。

静寂を切り裂くように、無機質なインターホンのチャイムが鳴り響いた。

心臓が喉までせり上がってくるかと思った。キーン、と耳の奥で鳴り響く高い音だけが、やけに大きく聞こえる。身体が氷のようにこわばり、息を呑む。私は抜き足差し足で玄関へ向かい、ドアモニターのスイッチに触れた。

画面に映っていたのは、人間、と呼ぶにはあまりに異質な姿だった。全身を真っ白な防護服で覆い、顔にはガスマスクと一体化したヘルメット。その姿は宇宙服のようにも、深海作業服のようにも見えた。腰のホルスターには、黒光りする銃が収まっている。淫魔症患者が凶暴化した場合に備えた、防疫官の標準装備だ。

「……月代（つきしろ）です」

震える声で応じると、ヘルメットのスピーカーから、くぐもった合成音声のような声が返ってきた。

『定期巡回デス。月代ミオさんノ、検査キットノ結果ヲ』

「……はい、今」

リビングのテーブルに置いてあったファイルを手に取ると、再び玄関へ向かった。ドアチェーンをかけたまま、数センチだけドアを開ける。隙間から、ひやりとした外気が流れ込んできた。

「……陰性、です」

ファイルのビニールポケットに入れた検査結果を、隙間から差し出す。防護服の分厚い手袋が、ひったくるようにそれを受け取った。男は手元の端末で何かを確認し、無言の時間が流れる。一秒が、一分のように長い。やがて、男が再び顔を上げた。

『本人ニ、イクツカ質問ガ』

「っ……！」

来た。

一番恐れていた言葉だ。

私は必死に平静を装い、予め用意していた嘘を口にした。

「あ、それが……今、お風呂に入っていまして……」

『……』

男は何も答えない。

ただ、ヘルメットの黒いバイザーが、怯えた女の顔を映し返している。

その奥にあるはずの瞳は、全く見えない。

沈黙が、私の嘘をじりじりと炙っていく。

不意に、男が手元の端末に視線を落とした。

『……ソウデスカ。前回、お伺いシタ時モ、確カソウデシタネ』

その平坦な声に、背筋を冷たい汗が伝う。

『ヨホドノ、お風呂好キデイラッシャル。月代ミオさんハ』

冗談めかした言葉なのに、声には何の感情も乗っていない。

頬を引きつらせる私をよそに、防疫官は端末に何かを打ち込むと、「デハ、マタ来週ニ」とだけ言い残し、背を向けた。

足音が遠ざかっていくのを、私は息もできずに聞いていた。

ガチャリ、と震える手で鍵とサムターンを閉め、ドアにずるずるとへたり込む。全身から、一気に力が抜けていく。

（気づかれてる……？　いや、まだ……）

疑われている。それは、確実だ。来週、また防疫官が来る。その時、私はまた別の嘘を用意しなければならない。いつまで、こんな綱渡りが続けられる？

ちゃんとミオのことを話すべきだ、と思う。

けれど、それで本当に大丈夫だろうか？

――致死率一〇〇パーセント。その文字が脳裏を過ぎる。

淫魔症に有効な治療法はない。テレビに出る専門家は皆そう言っていた。

『政府は患者を隔離治療すると言うが、その実、なにもしていない！』

『彼らは、患者を殺処分している！』

『隔離されて戻って来た人を見ましたか!?　誰もいないじゃないですか！』

テレビやネットで飛び交う、真偽不明の噂。けれど、ミオがあの防護服の男たちに連れて行かれ、二度と会えなくなる――その想像だけで、喉が詰まって何も言えなくなってしまう。

ポン！

堂々巡りの思考を、スマートフォンの通知音が断ち切った。

画面に表示されたのは、親友からのメッセージだった。

『ミオちゃんは大丈夫？この騒動が落ち着いたら、また三人で駅前のカフェに行こうね！何かあったらすぐ言ってね！』

送信者の名前は、――白凪（しらなぎ）チヒロ。

チヒロ……。

その名前に、胸がぎゅっと締め付けられる。

その優しさが、今は刃物のように心を抉った。

私は震える指で、当たり障りのない嘘を打ち返す。

【心配してくれてありがとう。大丈夫だよ。ミオもただの風邪だったみたい。】

大丈夫なわけ、ないのに。

画面を伏せると、私は再び、深く長い孤独の中へと沈んでいった。

二・怪物

ミオの症状は、日を追うごとに着実に悪化していた。

はじめは、ただの高熱だった。それが今では、熱に浮かされるように、ミオは絶えず何かを求めるようになった。シーツに身体を擦り付け、潤んだ瞳で私を見つめ、苦しげな、甘い吐息を漏らす。

「……あつ、い……おねぇ、ちゃん……なにか、へん……」

初めは、その訴えの意味が分からなかった。けれど、ある夜、部屋の様子を見に行った時、見てしまった。暗がりの中、ミオが自分のパジャマの中に手を入れ、小さな喘ぎ声を漏らしながら、必死に自分を慰めている姿を。その光景は、あまりにも痛々しく、そして冒涜的だった。私の可愛い妹が、病によって、自らの尊厳すら蝕まれていく。

見ないふりなんて、できなかった。次の日、再び、あの冷たい視線が待つ外の世界へ出た。向かったのは、繁華街の裏通りにある、大人向けの店。誰にも顔を見られないように、フードを深く被って。震える手で選んだのは、人に近い感触だというローターと、肌を傷つけないためのジェル。レジで商品を袋に入れられる、ほんの数十秒ですら、永遠のように感じられた。

その夜、ミオはまた熱に浮かされ、苦しそうに喘いでいた。

「ミオ……。楽にしてあげるから」

意を決して、声をかけた。顔には、使い捨ての医療用マスクを。手には、ぴっちりとしたゴム手袋を。まるで、汚染区域にでも踏み入るかのように。そうでもしないと、正気でいられそうになかった。

「……や……いやだ、見ないで……こんな、きたないから……」

ミオは涙を流して抵抗する。けれど、その身体は正直だった。

私の気配に反応して、腰が微かに震えている。何も言わずに、ミオのパジャマのズボンをゆっくりと引き下げた。露わになった妹の白い肌。その中心は、病の熱によって赤く腫れ上がり、恥ずかしいほど濡れていた。

ゴム手袋越しの指先にジェルをとり、そっと触れる。

「ひぅっ……！」

ミオの肩が、びくりと跳ねた。心を無にした。これは治療だ。妹を助けるための、医療行為なんだ。そう自分に何度も何度も言い聞かせながら、買ってきたおもちゃのスイッチを入れた。

ウィィィン、と低いモーター音が、静かな部屋に響き渡る。それを、妹の最も敏感な場所に、そっと押し当てた。

「……ぁ、ああ……っ！　いや、だめぇ、そんな……！」

ミオの絶叫が、耳を打つ。それは拒絶の言葉のはずなのに、その身体は正直に、

与えられる快楽に屈していく。シーツを掴む指先に力がこもり、綺麗な脚が、まるで助けを求めるように私の腰に絡みついてきた。

一度、二度、ミオの身体が大きく痙攣し、甲高い声が部屋に響いた。モーター音を止めると、ぜえぜえと荒い息を繰り返しながら、ミオはぐったりとシーツに身を沈める。これで、終わった。そう思った考えは、しかし、甘かった。息も絶え絶えのまま、その身体はまだ何かを求めて蠢いている。虚ろな瞳が私を見つめ、腰に回された脚が、もっと、とねだるようにぎゅっと締め付けてくる。病は、一度の絶頂では満足してくれなかった。

私は再びミオの秘部におもちゃを押し当てる。

二度目、三度目と繰り返すうちに、医療行為という建前は、少しずつ溶け落ちていった。目の前で繰り広げられるのは、ただただ猥褻な行為。私の可愛い妹が、私ではない何かによって、快楽の獣に変えられていく。

初めは恥じらいで潤んでいた瞳は、今や悦楽の熱だけでとろりと蕩けている。拒絶の言葉を発していた唇からは、媚びるような甘い喘ぎ声だけが漏れ聞こえる。

その、あまりにも無防備で、痴態と呼ぶしかない妹の姿を、マスクと手袋の壁の向こうから、ただ見つめていた。

その光景は、おぞましいはずなのに。恐ろしいはずなのに。いつしか私は目を離すことができなくなっていた。

＊

あの日以来、私の日常から日付と曜日の感覚が消えた。

朝、昼、夜の区別は、ただ部屋の暗さの濃淡でしかない。妹を介助し、汗を拭き、汚れたシーツを取り替える。その繰り返しが、私の世界の全てになった。

マスクと手袋が、私をただの看護人にしてくれる。そう思い込むことで、私はかろうじて正気を保っていた。けれど、病はそんな努力を、嘲笑うかのように破壊していく。

最初の異変に気づいたのは、ミオの汗をかいた身体を拭いている時だった。腰骨のすぐ下、その滑らかな肌に、見慣れない突起がある。指先でそっと触れると、骨のように硬く、けれど爬虫類の皮膚のように滑らかだった。

指に反応するように突起がぴくりと震え、同時にミオの身体が大きく跳ねた。その衝撃が、熱の靄を一時的に吹き払ったのだろう。虚ろだったミオの瞳に、はっきりと理性の光が宿り、私を捉えた。

「……おねぇ、ちゃん……？　なに、これ……こわい……」

そのか細い呟きは、しかし、すぐに激しい咳き込みにかき消され、ミオの意識は再び熱の海へと沈んでいった。だが、確かに聞こえたのだ。

病の奥底からの、妹の悲鳴が。

その悲鳴の正体を、私の指先に残る生々しい感触が告げていた。それは紛れもなく、腰から生えた、指先ほどの長さの、小さな悪魔のような尻尾だった。

――それが、始まりだった。

ミオの身体は急速に人間（ひと）ではなくなっていった。

汗を拭こうとめくった背中には、鳥の翼のようにも見える痣のような隆起が浮かび上がっていた。太ももの内側には、まるでタトゥーのように淡く発光する、蔦のような紋様が広がっている。時折、ミオの心臓の鼓動と呼応するかのように、ゆっくりと明滅している。まるで、肌の下で、別の何かが生きているみたいだった。

そして、決定的だったのは、数日後の夜。いつものようにミオを慰めても、その苦しみは全く和らがなかった。それどころか、涙を流し、何かを訴えるように自らの股間を指さしている。訝しく思い、下着をめくると、信じられないものが目に飛

び込んできた。そこには、女性器とは別に、小さな、しかしはっきりと形を成した男性器が生えていた。

時間が、止まったかと思った。理解が、追いつかない。恐怖よりも先に、ただ呆然と、変わり果てた妹の身体を見つめていた。

ふと、遮光カーテンの隙間から、夕焼けの茜色が一条、差し込んでいるのが見えた。どこか遠くの家からは、子供たちの楽しそうな笑い声と、夕食の匂いが漂ってくる。すぐそこにある、当たり前の日常。その光景が、今いるこの部屋の異常さを、暴力的なまでに私に突きつけていた。

けれど、ミオは苦しんでいる。目の前で。助けを、求めている。

「……っぅ、あ……おねぇ、ちゃ……ここも、へん、なの……たすけ、て……」

その言葉が、金縛りにあったような身体を無理やり動かした。もう、羞恥心なんてなかった。思考を止める。私はただ、妹を助けるだけ。ごくり、と唾を飲み込む。

震える指を、ゆっくりと、その見慣れない肉塊へと近づけた。

ゴム手袋越しの感触は、ひどく生々しかった。熱く、硬く、どくどくと脈打っている。ただ、妹を苦しみから解放するためだけに、祈るような気持ちで、それを上下に扱き始めた。

「んんっ……！　ぁ、あ……！」

ミオの身体が弓なりにしなる。苦しげだった喘ぎが、甲高い嬌声へと変わっていく。やがて、手の中に、熱い奔流が迸った。それは病が生み出した、おぞましくも純粋な生命の証だった。



ミオはぐったりとシーツに沈み、穏やかな寝息を立て始める。
けれど、私の心は少しも穏やかではなかった。
一線を、越えてしまった。
そう自覚して改めて部屋を見渡すと、この空間そのものが、もう後戻りできない場所になってしまったのだと理解できた。ゴミ箱からは、白いティッシュの山が溢れかえっている。換気扇をどれだけ回しても消えない、熟れた果実と蜜を煮詰めたような甘い淫臭。熱気と湿気で歪んだ壁紙。
ああ、そうだ。
ここはもう、あの頃の「可愛い妹の部屋」なんかじゃない。
ミオが変わっていくにつれて、この部屋もまた変貌していた。
甘い香りのする暖かい肉の巣へと。
ならば私は、その主に仕えるだけの存在になるしかないのだろうか。

＊

繰り返される毎日。

その日も、介助を終え、ぐったりとしているミオの額の汗を拭う。

ベッドに散らばる様々なおもちゃは、どれも淫液に濡れて鈍く光っていた。

あれから、ミオは意識がはっきりとしない日が続いた。それでも――いや、だからこそというべきか――性欲だけは無制限に増え続け、比例して射精の回数も増えていた。

「お姉ちゃん……」

不意に、ミオが掠れた声で私を呼んだ。その声は、驚くほどしっかりとしていた。

私が「なあに？」と微笑みかけると、ミオはゆっくりと私の手へと視線を落とした。その視線を追って、私も自分の手を見る。

ゴム手袋の指先に、拭き損ねた真珠色の染みが、微かに残っていた。

ミオの瞳が、驚きに見開かれる。

彼女の視線は私の手から、シーツに広がる染みへ、そして自分の股間に存在するはずのない肉塊へ、最後にシーツの隙間からのぞく短い尻尾へと、恐慌をきたしたように彷徨った。人間ではない自分の身体、そして姉に強いている行為、その全てを瞬時に理解してしまったのだ。

「あ……ああ……っ！　いやぁぁああ！」

ミオはパニックに陥り、身体から尻尾を引き抜かんとばかりに掻きむしる。

「ごめんなさい……ごめんなさい、お姉ちゃん……！　私のせいで……！　こんな、汚い、けだもの……！」

慌ててその両腕を掴み、背後から抱きしめた。

「しっかりして、ミオ！　大丈夫だから、大丈夫！」

ほとんど反射的に、ありきたりの言葉を繰り返す。

「もうやだ……！　もうやだよ……！」

ミオは私の腕の中で激しく嗚咽し、やがて、懇願するように言った。

「……お願い……。もう、死なせて……」

その言葉に、私は凍りついた。

ああ、この子は知っているのだ。いつかのテレビで言っていた【緊急避難措置】と呼ばれる、非情な選択肢の存在を。

衝動で叫んでいるだけではない。ミオは、自らの意志で、私にそれを求めている。

「これ以上、お姉ちゃんに迷惑かけたくない……。お願い、お姉ちゃんの手で、私を、人間に戻して……」

「馬鹿なこと言わないで！」

ただ、妹の身体を、強く、強く抱きしめることしかできなかった。

その時だった。妹を抱きしめる鼻腔を、この部屋を満たす甘い淫臭が、ふわりと通り抜けていった。いつもなら息を詰めるはずのその匂いが、なぜかその時は、不快ではなかった。それどころか、ミオの体温と混じり合ったその香りに、くらり、とめまいがするほどの心地よさを感じてしまったのだ。

視線が、シーツに落ちる。先程の介助で付着した、真珠色の精液の染み。それを見た瞬間、脳裏に、ありえないはずの衝動が稲妻のように閃いた。

――きれい。

――舐めてみたい。

「……え？」

自分の思考が理解できず、声が漏れた。弾かれたようにミオの身体から離れる。驚いて私を見る妹の顔が、やけに遠くに感じる。違う。今のは、私の考えじゃない。だって、そんな、汚い、おぞましいこと。けれど、一度生まれた欲望は、消えては

くれなかった。口の中にじわりと唾液が湧き、心臓が早鐘を打つ。自分の身体が、自分のものじゃないみたいだ。

自分の額に触れる。熱い。部屋の空気を吸い込む。甘い匂いが、まるで故郷の空気のように、すんなりと肺に収まる。

恐怖が、遅れてやってきた。

ミオを失う恐怖ではない。防疫官に見つかる恐怖でもない。

私が、私でなくなってしまう恐怖。

病は、もうとっくにマスクと手袋をすり抜けていた。理性の薄皮一枚を隔てたすぐ内側まで、怪物は忍び寄っていたのだ。

ミライ・ビジョン

一・崩壊

◆

夫の葬儀が終わって、三日が過ぎた。

リビングのローテーブルには、まだ香典袋の小さな山が残されている。部屋の隅に置かれた真新しい仏壇から、線香の匂いが薄く漂っていた。

広すぎるLDKに、私と、部屋で眠る娘の寝息だけが満ちている。数日前まで、ここに夫の笑い声もあった。その事実が、まるで遠い昔の夢のように感じられる。

冷めたコーヒーカップを手に取りかけた時だった。

ピンポーン、と無機質なインターホンの音が、静寂を破った。

ドアを開けると、そこにはスーツ姿のサワダが立っていた。夫の相棒だった、無骨で不器用な刑事。その手には、警察のロゴが入った味気ない段ボール箱が抱えられていた。

「……すまない。職務として、届けに来た」

鑑識から返却された夫の遺品だった。

「……公式には、事件は解決したことになった。すぐに犯人が見つかってな」

サワダは、リビングのソファでテーブルの箱を見下ろしながら、苦々しく言った。その言葉の端々から、抑えきれない悔しさが滲み出ていた。

「馬鹿げた話だが、上はそれで満足らしい」

そして、サワダはテーブルに置かれた箱を指し、私の目を真っ直ぐに見た。

その瞳には、同情とは違う、鋭い光が宿っていた。

「お前が何を考えているか分かる。だが、やめろ。あの異能（ちから）は使うな。マコトは……お前に平穏に暮らしてほしかったはずだ」

その言葉は、私の心の奥底を見透かしていた。

私が持つ、サイコメトリーの異能――触れた物に残された記憶を読み取る力。その力を使えば、事件の真相がわかるかもしれない。

私は何も答えなかった。ただ、きつく握りしめた拳が、かすかに震えていた。

その沈黙が、私の決意を雄弁に物語っていたのだろう。

サワダは深くため息をつくと、「頼むぞ」とだけ言い残し、苦渋の表情で立ち去っていった。

一人になった部屋で、私は遺品の箱と向き合う。

サワダの警告が、まだ耳の奥で響いていた。

私は息を殺して子供部屋のドアに近づいた。隙間から漏れる常夜灯の優しい光の中、聞こえてくるのは、すうすう、という安らかな寝息だけ。数日前まで、この静寂の中には夫の寝息も確かにあったのだ。

『その異能（ちから）は、もう使わないと約束してくれ。この子のためにも』

穏やかな声で、けれど真剣な眼差しで告げた夫の顔が瞼の裏に蘇る。

夫が命懸けで守ろうとした、私と娘のささやかな平穏。それを今、私自身の手で壊そうとしている。夫との約束を破り、危地へと足を踏み入れようとしている。

だが、このままではダメだ。

夫の死の真相が闇に葬られたまま、偽りの平穏の上でこの子を育てていくことなんて、私にはできない。

「ごめんね……」

誰にともなく囁き、私は静かにドアを閉めた。
もう涙は出なかった。
悲しみで濡れていた瞳の奥に、氷のように冷たい決意の光が灯る。

◇

――鉄錆と、血の匂い。低い怒号。悲鳴。
これは、あの人（マコト）の最後の記憶だと直感する。
瞼の裏に広がるのは、見知らぬ暗い倉庫。コンクリートの床に頬を押し付けられ、口の中に広がる鉄の味。
即座に身を起こし、目の前の影に向けて引き金を絞る。
立て続けに三発。薬莢が弾け、硝煙が立ち込める。

だが、影は眉一つ動かさない。放ったはずの弾丸が、カン、カン、と甲高い音を立てて、まるで小石かのように素手で弾き落とされた。

全身が粟立つ。信じられない光景に思考が停止した、その一瞬。

背中に、灼けつくような激痛が走った。

肉が裂ける生々しい感触。二人目の気配。

ぐ、と呻きながらも振り返り、背後の敵に銃口を向けようとする。

しかし、それより速く腕に衝撃が走り、手にした拳銃が宙を舞った。

咄嗟に距離を取ろうと足に力を込めるが、それも適わない。

背中から広がった熱い痺れが、瞬く間に身体の自由を奪っていた。踏ん張るどころか、逆に力が抜けてガクンと膝をつく。

「毒……か……!?」

視界が揺らぐ。目の前に、腕を弾いた男が歪んだ笑みを浮かべて立っていた。

その指先が、きりきりと音を立てて伸び、鋭い刃のような爪へと変貌する。
身体が動かない。抵抗する術もない。
「すまない……ハルカ、ミライ……」
逃げ場のない俺に、死神の鎌が振り下ろされ――

◇

「……っ……！」
私は目を見開き、警察手帳から勢いよく手を離した。
心臓が激しく脈打ち、全身が冷たい汗で濡れている。
記憶に少し潜るだけであっても、他人の記憶――とりわけ強烈な記憶を視るのは、魂が削られるような苦痛を伴う。

この異能を使い続ければ、いずれ私は私ではいられなくなる。
だから夫は、この力を封印させたがったのだ。
だが、代償を払って得た情報は大きかった。
叩きつけられた真実の断片。
――やはり、真犯人がいる。
夫は警察も手を出したがらない何かに巻き込まれた。
そして、真実は闇の中に葬られようとしている。
その事実に、心の奥底で燻っていた悲しみが、消し飛んだ。
消えたのではない。憎悪を新たな薪にして、業火のごとく燃え上がったのだ。
だが、その熱は私を焼かない。捜査官時代の習慣が私を逆に冷静にしていた。
頭は冷え、余計な感情が抜け落ちる。
この燃え盛る炎は、真犯人だけを焼き尽くすためにある。

身支度を整えるため、私は立ち上がった。

寝室に戻り、クローゼットの奥から、捜査官時代の装備を引っ張り出す。黒いジャケット。動きやすいパンツ。使い慣れた革のブーツ。久しぶりに袖を通すそれらは、まだ私の身体を覚えていた。

鏡に映る自分の顔は、数日前とは違って見える。

母親ではなく、捜査官の顔だ。

次に向かうべき場所は、もう決まっている。



二・協力者

向かった先は、都心に程近い雑居ビル。そこに、レイは事務所を構えている。表向きは完全予約制の占いサロン。だが実態は、極上の情報を扱う情報屋だ。

捜査官時代、私も何度かレイの情報に助けられたことがある。異能者同士ということもあり、私たちはすぐに打ち解け、いつしか友人になっていた。

ドアを開けると、微かなアロマの香りと共に、穏やかな声が私を迎えた。

「いらっしゃい、ハルカさん。……来ると思っていたわ」

ソファに腰掛けていたレイは、驚くでもなく、静かにお茶の準備をしていた。彼女の異能――未来視（ビジョン）は、今も健在のようだ。

「相変わらずね、レイ」

力なく笑う私に、レイは温かいお茶（ハーブティー）を差し出しながら、優しく目を伏せた。

「マコトさんのこと……言葉もないわ。……本当に、いい刑事だった。私にとっても……特別な人だったから」

レイはそう言って机に目を落とした。そこに置かれた一枚の写真立て。同僚たちと笑い合う、捜査官時代の夫の姿。その隣には、今より幼げなレイの姿もあった。

共有された悲しみの深さに、堪えていたものが溢れそうになる。私はそれをぐっとこらえ、本題を切り出した。

「――例の事件、あれは警察が言うようなものじゃない。あの人の記憶に、異能者が視えたの」

そこから先は、堰を切ったように全てを話した。レイは私の話を、一度も遮ることなく、ただ静かに聞いていた。

全てを話し終えた私に、レイはそっと手を握った。

「ハルカさん、私にも手伝わせて。友人として、あなたを一人にはしておけないわ。

……彼のためにも、最後まで見届けさせて」

その言葉は、暗闇の中に差し込んだ一筋の光のように、私の心を温めた。

「ありがとう、レイ……」

レイは一度目を閉じ、集中するように言った。

「今の私に見えるのは、深い霧だけ……。でも、ハルカさん、あなたが動けば、水面に波紋が広がるように、未来への道筋がきっと視えるわ」

レイはそう言うと、数分間の沈黙の後、ゆっくりと目を開けた。

「視えたわ……。最初に接触すべき人物の姿が……。でも、危険な男よ。会いに行くなら、慎重に準備をしないと」

レイは、その男の居場所と特徴を、私に具体的に指し示した。唯一信頼できる友人の協力に、私は確かな希望を見出す。

私が礼を言って部屋を出て行く直前、レイは穏やかな笑みを浮かべていた。



＊

それから一週間。

レイから得た情報を頼りに、私は夜の街を駆け回っていた。

最初の標的は、港湾地区を縄張りとする皮膚を鋼鉄に変えるチンピラ。

次の相手は、視線だけで甘い幻覚を見せる娼婦。

どちらも危険な人物だったが、夫の死には結びつかない末端の存在だった。

レイの言う波紋を立てるために、私は戦いに身を投じ、心身をすり減らしていく。

それでも、夫の死の真相には辿り着けない。

進展のない状況への焦りが、じりじりと私の精神を蝕み始めていた。

三．焦燥

二度目の戦いから三日が過ぎた夜、レイから三度目の情報が届いた。

『今度の相手は少し違うわ。異能を強化する薬を扱っているらしいの』

電話口のレイの声には、どこか期待を煽るような響きがあった。

二度の空振りで焦りが募る。それでも、私はレイの情報に賭けるしかなかった。初めて夫の死の真相に繋がるかもしれない、一条の光に思えたのだ。

その光を頼りに、私は指示された夜の繁華街へと向かった。

ネオンの光が届かない、ゴミの匂いが立ち込める路地裏を、息を殺して進む。夫の仇に辿り着くためなら、どんなリスクも厭うつもりはない。

レイが指し示した標的――異能者崩れのゴロツキは、すぐに見つかった。袋小路の奥、数人の仲間と共に酒を飲んでいる。私の姿を認めると、仲間の一人が下卑た

笑みを浮かべて立ち塞がった。

「よう姉ちゃん、一人か？　俺らと遊んでいかねえ？」

私は無言のまま、一瞬で相手の懐に踏み込み、鳩尾に正確な一撃を叩き込んだ。呻き声も上げられずに崩れ落ちる仲間を見て、残りの男も呆気に取られている。その隙を見逃さず、二人目の顎を蹴り上げる。

ターゲットのゴロツキは、仲間が瞬く間に無力化されたのを見て、ようやく私がただの女ではないと悟ったらしい。顔を恐怖に引きつらせ、踵を返して逃走した。

「待ちなさい！」

繁華街の雑踏を抜け、入り組んだ裏路地を駆け抜ける追跡劇。男は逃げながら、その手のひらから鋭い骨片を生成。背後へと射出する。それが男の異能らしい。

アスファルトに突き刺さるそれらを冷静に見極め、私は身を翻して躱し続ける。数年のブランクがあっても、元捜査官としての身体のキレは鈍っていなかった。

やがて袋小路に追い詰め、なおも骨片を放とうとする男の腕を掴み、捻り上げる。短い悲鳴と共に、男は完全に戦闘意欲を失った。

「組織について知っていることを全部話しなさい！」

「そ、組織なんて知らねえ！　ただ異能を強化するヤクを買っただけだ！」

レイの予知では、この男が夫を殺した組織と重要な取引をしていたはずだった。しかし、男は震えながら喚くばかりだ。

「その薬は!?　まだ持っているんでしょう!?」

私の有無を言わさぬ声に、男は恐怖に引きつった顔で、懐から小さなアンプルを取り出した。粘性の高そうな、不気味な紫色の液体が中に満ちている。

私は男の腕を掴んでいた手を離し、そのアンプルに指先でそっと触れて記憶を手繰る。瞬間、激流のようなビジョンが、私の精神を蹂躙した。

◇

――白い、無機質な部屋。この身体が、冷たい拘束台に縛り付けられている。見下ろしてくる白衣の人間たち。注射器の針が、私の首筋に突き立てられる。冷たい薬液が流れ込んでくる感触。自分の喉から迸る、聞き覚えのない絶叫が、異能の暴発となって光の濁流へと変わる。そして、白衣の一人の胸元で、黒い幾何学模様のシンボルが、不気味に揺れた――。

◇

「……っ、ぁ……！」

脳を直接焼かれたような衝撃に、立っていられなくなる。私はその場に膝から崩れ落ち、激しい嘔吐感に襲われた。

今の光景は、薬そのものに焼き付けられた記憶の断片――製造過程の断末魔だ。

私が無様に床に蹲るのを好機と見たのだろう。ゴロツキはアンプルを懐にしまい込むと、脱兎のごとく踵を返して走り去っていった。

追いかけようにも、身体に力が入らない。脳が情報の洪水を処理しきれず、激しく警鐘を鳴らしていた。

＊

結局、行方を眩ませた男を再び見つけることはできなかった。

（ようやく掴んだ手がかりをまんまと逃がすなんて、捜査官失格ね……）

疲労感と自己嫌悪に苛まれながら、私はふらつく足取りで路地裏から抜け出し、ネオンと喧騒の中へと戻る。誰も私のことなど気にも留めない。

この街の孤独が、今はやけに身に染みた。

ポケットのスマートフォンが鳴ったのはその時だった。

ディスプレイに表示された「サワダ」の名前に、私は小さくため息をついた。

『ハルカ、この件には関わるなと言ったはずだろ！』

電話に出るなり、予想通りのサワダの怒声が響く。

「繁華街で異能絡みの騒ぎがあったと通報があった。お前だろう！　いいか、お前が追っているのは、警察でも手出しできない連中だ。いくらお前でも危険すぎる！」

その声には、本気の心配が滲んでいた。だが、今の私には、その言葉は届かない。

「それでも、前に進むしかないの」

『馬鹿を言うな！　お前にまでなにかあったら、あの子は……ミライはどうするんだ！』

娘の名前を出され、私は一瞬、言葉に詰まる。

「……夏休みだから、ミライは実家の母にお願いしているわ。それに……あなたには、そんなこと関係ない」

言ってしまってから後悔が押し寄せる。

電話の向こうで、サワダが息を呑むのが分かった。

『……確かに、俺は君とは、もう関係ないかもしれない……だが……』

静かで、諦めたような声だった。

「ごめんなさい。言い過ぎたわ……でも、せめてこの夏が終わるまででいいの。納得が行くまで、調べさせて」

私はそう言って、一方的に通話を切った。

重い沈黙が私を包む。

私は近くの公園のベンチに、崩れるように座り込んだ。

夜風が汗ばんだ首筋を撫でる。

遠くで酔客の笑い声が聞こえてくる。

街灯の下を、犬を連れた老人がゆっくりと横切っていく。

こんな時間でも、誰かの日常は続いている。

ポケットの中を探る指が、くしゃくしゃに折り畳まれた固い紙に触れた。

今朝、娘が「おまもり」だと言ってねじ込んできた、画用紙の切れ端だ。

開くと、三人のいびつな人間が、虹色の太陽の下で手を繋いでいた。拙い文字で「ぱぱ　まま　みらい」と書かれている。ぱぱの頭には、ピカピカの金の王冠が描かれていた。

紙の上に、ぽつりと熱い雫が落ちる。

「ごめんね……」

誰にともなく囁き、私はその絵を丁寧に折り畳み直すと、ポケットの奥へとしまい込んだ。それは宝物のように温かく、鉛のように重かった。

目を閉じると、マコトとミライの笑顔が浮かんでくる。

以前、三人でこの公園に来たこともあった。ミライはまだ小さくて、すべり台が怖いと泣いて、マコトが何度も一緒に滑ってやっていた。あの人は膝が砂だらけになっても笑っていて、私はベンチからそれを眺めていた。――ちょうど今、こうしているように。

それがどれほど大切で、尊い時間だったのかを、今さらながらに思い知る。

――私は、一体何をしているのだろう。

夫を失った悲しみは、サワダだって、お義母様（かあ）だって同じはずだ。

実家で帰りを待つ娘は、まだその事実を受け止められてさえいない。

もう、やめよう。こんな復讐ごっこは。

帰ろう。ミライのところへ。

そう決意し、目を開けた、その時だった。

ポケットで、再びスマートフォンが震えた。

ディスプレイに浮かぶ「レイ」の二文字。

――出てはいけない。

この電話に出てしまえば、もう引き返せない予感があった。娘の待つ平穏な日常に戻る道が、永遠に閉ざされてしまう気がする。

分かっている。分かっているのに。

脳裏をよぎるのは、血と錆の匂いに満ちた、夫の最期の記憶。あっけなく、何もわからず奪われる無念。

私は震える指で、ゆっくりと、通話ボタンを押した。

『ハルカさん、ようやく未来が固まったわ』

四・罠

レイが示したは、湾岸地区にそびえる古い廃棄工場だった。

今夜、やつらが例の薬の取引を行う――レイの未来視が、そう告げていた。

教えられた潜入ルート――錆びついたダクトを通り、私は内部への侵入に成功する。不気味なほどに静かで、警備の気配も感じられない。それが罠とも知らず、私はレイの未来視のおかげだと、この時まで微塵も疑っていなかった。

中枢部と思われる、最も奥の開けた部屋にたどり着いた瞬間。背後でダクトの入り口が、けたたましい音を立てて塞がれた。同時に、頭上のライトが一斉に点灯し、私の姿を白日の下に晒し出す。

待ち構えていたのは、銃口をこちらに向ける多数の武装した男たち。そして、その中央には――穏やかな笑みを浮かべた、レイが立っていた。

「レイ……？　どうして……あなたが……？」

その光景が信じられず、私はか細い声で問いかける。

「ごめんなさい、ハルカさん。あなたの異能（ちから）は、私たちの理想にとって邪魔なのよ」

レイは穏やかな笑みを消し、その瞳に昏い熱を宿した。

「――いいえ、違うわね。理想？　組織？　そんなものはどうでもいい」

その声には、嘲りと、抑えきれない憎悪が滲んでいた。

「あなたをハメる理由なんて、最初から一つしかない」

レイは一歩、私に近づいた。

「あなたが愚かだったから。あなたがこんな単純な罠にも気づけない愚か者だったから――あの人は死んだ」

「……え……？　なに、を……」

レイの言葉が、まるで理解できない。

私は混乱したまま、首を振ることしかできなかった。

信じられない。信じたくない。

レイは、私の困惑した様子を見て、満足げに口元を歪めた。

その時――彼女の襟元に留められたブローチが、私の視界に入った。

思考が、凍りつく。

吸い込まれるように深い黒色の金属。精緻に刻まれた幾何学模様。

それは――薬のビジョンで視た、あのシンボルだった。

全身の血の気が引いていく。目の前の友人の顔が、得体の知れない怪物へと変わっていく。

「……っ！」

声にならない喘ぎを漏らす私を見て、レイは小さくため息をついた。

「普通の相手なら、もっと簡単だった。でもあなたは違う。あなたを確実に捕獲で

きる未来を手繰りよせるためには、少しだけ準備が必要だったの」

レイは、捕らわれた獣を見るような目で私を見下ろす。

「覚えてる？　あなたが立てる波紋が、未来への道筋になるって言ったでしょう？　あれは本当よ。――もっとも、『その道筋が、消耗しきったあなたが、この罠に飛び込むためのもの』だとは、言わなかったけれど」

「友人ごっこはこれで終わり」とでも言いたげに、レイは肩をすくめてみせた。

これまでの私の苦闘は、すべてレイの掌の上で踊らされていたに過ぎなかった。信頼していた友人からの裏切り。その事実は、怒りよりも先に、骨の髄まで凍りつかせるような、冷たい絶望となって私の心を支配していった。

「いつから……、まさか、最初から……？」

レイは笑みを深くするだけでなにも答えない。

「あ、あなたは――ッ！」

凍りついていた絶望が、沸騰するような怒りへと変わる。

私は床を蹴り、最短距離でレイへと肉薄する。周囲の男たちが素早く反応し、引き金に指がかかるのが分かる。

だが、レイは静かに片手を挙げて部下を制する。

「……いいわ、最後くらい付き合ってあげる」

私が放った渾身の掌底が、空を切る。

レイの身体が、まるで霞のように揺らいだように見えた。手応えのない感触に一瞬思考が凍りつくが、構わず、踏み込んだ勢いのまま逆の腕で肘を叩き込む。

だが、それもまた、信じられないほど柔らかな動きでいなされ、私の腕はレイに掴まれてしまった。

――まずい。

掴まれた腕を支点に、流れるような体捌きで重心を奪われる。



抵抗する間もない。身体は宙に浮き、そのまま無様に床へと叩きつけられた。
受け身も取らせてもらえず、私はレイに組み伏せられた。
「抵抗しても無駄よ。私にはもう視えているもの」
レイは私の耳元で囁くように、自らの視た未来を語り始める。
「あなたがこれから実験台の上で泣き叫ぶ姿も、薬と快楽にグズグズに蕩けて壊されていく姿も……本当に、惨めで、滑稽な堕ち方をするわ、あなた」
（薬に実験……？　こいつらは異能者を集めてなにをしているの？　私もその実験に加担させられる……？）
「ふ、ふざけるな……っ！　誰が、お前たちなんかに……！」
身体の自由は奪われても、魂は屈しない。私はその意志を全て瞳に込め、レイを睨みつけた。
「あの人といい。正義感の強い人間は面倒よね」

レイはそう言って、面白がるように唇の端を吊り上げた。

「でもね、ハルカさん。あなたの弱点はすごく簡単――」

レイは部屋の巨大なモニターを指し示した。

スイッチが入れられ、モニターに映し出されたのは、実家の母に預けているはずの娘――ミライの姿だった。

私が子供の頃に使っていた、懐かしい部屋。

その部屋で、娘がおもちゃで無邪気に遊んでいる。

「心配しないで。これはただの保険よ。あなたさえ手に入れば、娘に手出ししない。異能もないただの子供なんて、組織は求めていないわ」

レイは続ける。

「ほら、簡単でしょう？　あなたはただ、母親に戻ればいいだけ」

モニターの中で、ミライが画用紙に何か描いている。無邪気な横顔。

ここで私が抵抗すれば、レイの指示一つで、あの横顔が――

その先を想像した瞬間、怒りが消えた。

いや、消えたのではない。怒りよりもっと大きな恐怖に、塗り潰されたのだ。

私はミライのためにも真相を暴いてやると、そう思っていた。思い込んでいた。

いや――思い込むふりを、していたのかもしれない。

あの人を喪して、自分の無力感に耐えられなかっただけだ。

本当は前を向かなければいけなかったのに。無謀なことをして、私の手に余る相手に手を出して――今度はミライまで危険に晒している。

ああ――。

私の目から、光が消える。身体から、力が抜けていく。

――私はもう、戦えない。

うなだれた私を武装した男たちが手早く拘束し、連れられて行く。

戦う者としての私の記憶は、そこで途絶えた。

イミテーション・ラブ

一

統合歴４１０年　８月24日　13：45　グレゴリオ海域防衛戦
第七機動部隊所属　魔装機ヴィクトール００２号機
二番コアシリンダー　暁琉（あかる）－ＲＦ06

【三番コアシリンダーの強制イジェクトを受諾しました。60秒後にイジェクトを実行予定。動力供給の低下に備えてください】

「な、なに言ってるのＭＥＬ（メル）!?　そんな命令出してない！　今すぐ撤回して！」

突然響いたＡＩの宣告に、私は激しく狼狽していた。
三番コアシリンダー――エリーリの状態は本人からも報告を受けたばかりだ。
視線を落としたコンソールには、冷たい事実が突きつけられていた。
汚染レベルを示す赤いバーは、とうに廃棄基準を振り切っている。
通信からは今も、エリーリの荒い呼吸と、ぬるりとした水音、何かが這いずるおぞましい音が響き続けている。
しかし、それでも、私にはその判断を下す勇気がなかった。
【ネガティブ。あなたの権限レベルでは命令を撤回できません】
「なんでよ！　いいから撤回しなさい！　エリーリはまだ生きてる！　医療ポッドで休めば――」
『――ぅ、あ……、る？　……アカル、いいの……っ』
エリーリの声は震え、熱に浮かされたような吐息が混じっていた。

「エリーリ！」

『私が……司令部にお願いした……の、廃棄して欲しいって……』

エリーリの言葉は途切れ途切れで、時折なにかを我慢するように艶めかしい声が漏れた。モニター越しに何かがのたうつたびに、その声が切なさと快楽を混ぜ合わせて響いた。

「なんで……なんでだよぉ……」

私は涙をこらえ、エリーリの言葉を必死に聞き取ろうとしていた。

『自分のことは、自分が一番わかるもの……』

エリーリの声は弱々しく、しかしそこには確かな決意が感じられた。

『そ、それより、聞いて……アカル……私、わかったのよ……』

【残り30秒】

「なにが……だよ……」

自分でも思っていた以上に、声が震えていた。時間が迫る中、エリーリの苦痛と快楽が混ざり合った声が私の心を締め付けた。

『……前に話した……でしょう？　私たちイミテーションは……なんのために……産まれて……、どうして……戦うのか』

エリーリは喘ぎながらも、なんとか言葉を紡いだ。のたうつ触手の感覚に、必死に耐えているのだろう。

「妹たちを守るためだろ！　エリーリがそう言ったんだろ……！」

私の声は叫びに変わった。しかし、エリーリの苦痛を和らげることはできなかった。

『ちが……っ、ん……は――あ、おお♡』

ノイズ交じりの声が震えた。何かに抗おうとして、しかし、こぼれた声は甘く蕩けていた。

『は、はぁ……わたし、たちは……ね　幸せに……なるために、産まれたの……。あ、ああ……そうなのっ　この数時間…っ……ずっと……愛されて！　ハァ……ハァ……気がついたの……！』

モニター越しに映るエリーリの姿は、あまりにも変わり果てていた。

コアシリンダー内部は無数の触手で埋め尽くされ、パイロットスーツの表面は粘液でぬるぬるに濡れそぼっている。スーツの上を這う触手、そして継ぎ目から潜り込んだ触手が、内と外から身体を蹂躙していた。

『私たち……イミテーションは……こうして……全部……受け入れて……ッ……ハァ……ハァ……愛されて……お、おぉぉっ♡　こうして、捧げ尽くして……気持ちよく、していただくのが……本当の、幸せだったって♡』

太い触手が秘裂を限界まで押し広げ、凶悪な突起に覆われた表面が、彼女の最も柔らかい場所を容赦なく抉りながら沈んでいく。

モニター越しでも分かるほどの暴力的な侵入。背筋が凍る。

『んひぃいいいいぃっ♡　アカルぅ、見てぇ……♡　こんなの……こんなの初めてぇ……♡　奥まで……全部……愛されてるぅ♡』

快楽を訴える口を煩いとばかりに、別の触手が喉奥までねじ込まれる。

ジュル、ジュルゥ、と唾液と粘液を練り上げる卑猥な音が通信から響く。

エリーリの身体が弓なりに仰け反るたび、何か熱いものが直接注ぎ込まれているのだろう、下腹部がスーツを押し上げるように、物理的に、ありえないほど膨らんでいくのが見えた。

『んぶぅううっ♡　ぶ、ぶくむうう……♡　ぐむおお……っ♡』

そして最後に、結合した触手が一際大きく脈打つ。

エリーリの身体を食い破らんばかりの勢いで、巨大な「種」の塊を胎（はら）の最奥――入ってはいけない深さまで、ずぶずぶとねじ込んでいった。

『――――んんんんんんんんんんっ♡♡♡』

エリーリの目が完全に裏返るのが見えた。

喉奥を塞いでいた触手が、ジュポッ、と卑猥な音を立てて引き抜かれる。

舌をだらしなく垂らし、涎と粘液に塗れながら、彼女は壊れた笑みを浮かべた。

『っ、ぷはぁ……っ♡　はぁ……はぁ……あ、アカルぅ♡　アカル……も……♡　連れてい〝って……あげる♡　いっぱい……いっーばい愛されてっ♡　いっじょに、いじょにいいぃ――――♡♡♡』



【――強制イジェクト、実行】

ブツン、と映像が途切れる。

次いで、機体に軽い衝撃。

三番コアシリンダーが、闇へと射出されていく。

モニターの片隅、漆黒へと放り出された銀色のコアシリンダー。それを目掛けて、まるで甘い蜜に誘われる虫のように、周囲の闇から棘皮動物めいたおぞましい淫魔種たちが殺到する。無数の棘と触手がコアシリンダーに絡みつき、貪るようにその表面を覆い尽くしていく光景が、音もなく映し出されている。

【三番コアシリンダー：璃音（りおん）－ＥＬ 11 を破棄しました。動力供給 35 %に低下】

「……」

静寂の中、私は呆然と、暗転したモニターを見つめていた。

最期の瞬間、汚辱の果てに快楽に堕ちたエリーリの顔。

あの、蕩けるような、恍惚の表情と声音。それだけが、ずっと脳裏に焼き付いて離れなかった。

【一番コアシリンダー：欄流（らんる）－ＲＦ03　フルコネクト中のフィードバック・オーバーフローにより死亡】

【二番コアシリンダー：暁琉－ＲＦ06　魔力欠乏による身体ダメージ高】

【三番コアシリンダー：璃音－ＥＬ11　重度汚染により廃棄処分】

私だけが、生き延びてしまった。

その罰のように、再編された第七機動部隊で与えられたのは、一番コア――かつて、欄流－ＲＦ03――ランがいた、チームリーダーの席だった。

二

統合歴４１２年　４月27日　09：22　オーレクト海域遭遇戦
第七機動部隊所属　魔装機ヴィクトール００２号機
一番コアシリンダー　暁琉（あかる）－ＲＦ06

死んだような静寂が、私のコアシリンダーを満たしていた。
数分前まで耳を劈いていた爆音と衝撃は、今や嘘のように途絶えている。
自身の荒い呼吸と、予備電源で稼働する生命維持装置のか細いハミング音だけが、狭い空間に響いていた。
正面のメインモニターは、大半がエラーを示す赤色に染まっている。
外部との通信は途絶。主動力も完全に沈黙。

ただ、機体深度を示す数字だけが、無慈悲にその数値を増やし続けていた。

――落下している。深海へと。

このままでは、あと数千メートルで限界深度に達する。機体は圧壊し、私たちは死ぬだろう。

『……コア・ツーより、コア・ワンへ。……応答して、アカル！』

不意に、ノイズ混じりの声が通信機から響いた。

ナツの声だ。二番コアシリンダーのモニターに視線を移す。そこに映るのは激しく流れるエラーログばかりで、その顔を見ることはできない。

「こちらコア・ワン。……生きているわ、ナツ」

応答した瞬間、私の返事を待っていたかのように、金切り声が叩きつけられた。

『あんたのせいよ！　あんたが余計なことしなければ！　こんなことにはならなかった！　姉さんの時と……！　姉さんの時と、同じじゃない！』

言葉が、氷の棘のように胸に突き刺さる。

ナツの言う通りだ。私はエリーリを――ナツの姉を守れなかった。それを今でもナツは責めている。そして、きっと……その責めは、正しい。

『や、やめて、なっちゃん…！　今は、そんなこと言ってる場合じゃ……！』

今度はエルミナの必死な声が通信機から聞こえた。三番コアシリンダーのモニターを見る。そこは暗転したままで、何も映らない。

「コア・スリー、状況を報告して。そっちのカメラ死んでるわよ」

『あ……はい！　大丈夫です、私は無事……っ！』

その時、通信機の向こうで、エルミナが小さく息を呑む音がした。

「エルミナ？」

『ご、ごめんなさい……！　ちょっと、戦闘で傷つけた脚が、熱っぽくて……。でも、本当に大丈夫、ですから』

通信機越しの声は、必死に平静を装っている。

「わかった。無理はしないでいいから、ね」

がんばり屋のエルミナのことだ、無理をしているに違いない。それでも、今は彼女に気を配っている余裕がない。

正面のモニターに向き直り、私はコンソールを操作した。ＭＥＬ（メル）のサポートはまだ生きているようだ。

【主動力再起動プロセスを再編――警告。三番コアシリンダー：精神反応に不安定性を検出。プロセス実行中のエラー発生確率――】

「黙ってＭＥＬ。レベル（アラート）３以上の泣き言はいらない」

無粋な警告を発するＭＥＬを黙らせて、私は息を大きく吸い込んだ。ここが正念場だ。

「――二人ともよく聞いて。主動力を再起動させて浮上するわ」

『でも、それって……』

「わかってる。魔力反応で確実にヤツラに見つかるわ。だけど――それでもやらなきゃ、あと数分で機体が圧壊する」

誰も反論しなかった。

ただ、沈黙の向こうで、それぞれが覚悟を決める気配がした。

「シーケンスデータを、そっちにも転送する。……三人でやるわよ！」

通信機に向かって、拒否を許さない口調で言い放った。

「いいわね？」

しばしの沈黙。

やがて、通信機からナツの悔しそうな、しかし承諾の意を示す短い舌打ちが聞こえた。続いて、エルミナのか細い『はい』という返事が響く。



音のない深海。視界は闇と赤い警告光に満たされ、ただ機体はゆっくりと圧壊へ向けて沈降を続けている。三つの閉ざされた空間で、それぞれの顔も見えぬまま、私たちは生き残りを賭けて、静かに動き始めた。

三

統合歴４１２年　４月27日　09：36　オーレクト海域遭遇戦
第七機動部隊所属　魔装機ヴィクトール００２号機
三番コアシリンダー　照陽（しょうよう）－ＥＭ04

（いや……やめて……こっちに、来ないで……）

暗く、赤い非常灯だけが明滅するコアシリンダーの片隅で、私はシートの端に必死に体を寄せていた。

すぐそこ、ほんの数センチ先。戦闘で生じた亀裂から侵入した忌まわしい何かが、ぬらり、と身じろぎしている。紫色の、濡れた絹のような光沢を放つ淫魔種の触手。それはまるで、もう一人の同乗者のように、当然のように居座っていた。

『コア・スリー、補助回路のバイパスを開始して。あちこちズタズタだけど、慎重にやれば大丈夫』

通信機から、アカル先輩の冷静な声が響いた。

返事をしたいのに、喉がひきつって声が出ない。身を捩るたびに、スーツ越しに伝わる冷たく、ぬるりとした感触に背筋が粟立つ。

（……っ、いつの間に……！）

触手の一本が、関節部の隙間からスーツの内側へと侵入しようとしていた。

魔力伝導用の薄膜と肌の間に、冷たく湿った異物が滑り込む。

ぴったりと張り付いた生地が、内側から押し広げられていく。

繊維のきしむ音。肌と布の間に生まれたわずかな空間へと粘液が流れ込み、その温度差に思わず息を呑んだ。

「う、そ……や、やだ……！」

押さえた股間に、生身に触れる粘膜のぬめり。

スーツのクロッチ部は汗と粘液を吸って柔らかくなり、境界を曖昧にしたまま、外からの蠢きと内側の熱を混ぜ合わせる。ぴたりと張り付く布越しに、いやらしい脈動が奥まで響く。

（しっかりしなきゃ……私が、やらなきゃ……！）

自分を叱咤して、震える指をコンソールのパネルへと伸ばす。

だが、その刹那――ぬるり、と。まるで意思を持ったかのように、触手が敏感な部分を探り当て、そっと撫でてきた。

「ひ……っ！」

喉が引き攣る。快楽を塗りこむような蠢き。

腰が痺れる。奥の方がきゅう、と切なく疼く。

『……何やってるの、エルミナ！　エネルギー流量が不安定よ！』

なっちゃんの鋭い声が飛ぶ。モニターの数値が危険域を示していた。
私のせいだ。この、いやらしい触手に気を取られて……！
「ご、ごめんなさい！　すぐに……修正……んんっ！」
指先が思うように動かない。甘く嬲られ続ける感覚に、思考が痺れていく。
そして――震える指先が、滑った。
直後、コアシリンダー全体を揺るがすような警告音が響き渡る。
【警告。魔力炉、臨界圧力に異常発生、二番コアシリンダーに逆流しています】
『きゃあああっ！』
なっちゃんの悲鳴。魔力炉のバイパスが間違ってる、このままじゃ二番コアが潰れちゃう。
無理だ。間に合わない。私のせいで、なっちゃんが、みんなが……。
絶望に押し潰されかけたそのとき――

『……コア1、第7回路を強制閉鎖！　コア2への供給をこっちにも流して！』

アカル先輩の声が響く。その冷静な声音に、私の意識も引き戻された。

（そうだ、まだ……まだ終わってない！）

『エルミナ！　補助回路を開いて、エネルギーを外部放出して！　ゆっくり、慎重に。いけるわね？』

「……はいっ！」

意識を切り替える。触手の蠢きも、粘液のぬめりも、忘れる。

コンソールに意識を集中し、補助回路を開く。

コアシリンダーにバイパスされている過剰な魔力を慎重に外へと導いていく。

触手がなおも、私の集中を試すように蠢いている。

けれどもう、負けたりしない。

――やがて、警告音が止んだ。

モニターの数値も安定し、海水に押し流されるように、緊張が抜けていく。静寂が戻る。

『……助かったわ、その……ありがと』

『……まだ終わってないわ』

『……エルミナ、あんた……本当に大丈夫なのよね？』

「だ、だいじょうぶ、です……！」

なっちゃんとアカル先輩の声に、震えながらも頷き返す。

（……よかった。本当に、よかった。私たち、生きて還れるかもしれない）

安堵から、全身の力が抜ける。張りつめていた心の糸が、ぷつりと切れたようだった。

やがて、――ゴゴゴゴゴゴッ、と唸るような音と震動が響き渡る。
それは主動力の再起動を告げる音。深海に響き渡る、魔装機の咆哮。
エネルギーの輝きが、この暗黒の空間を照らし出す。
【主動力再起動プロセスを完了。おめでとうございます】
（やった……！　これで……浮上できる……！）
歓喜の声を上げそうになった、その刹那――。
今まで弄ぶだけだった触手が、鋭く、硬く、その形を変える。
そして――既に湿り切ったソコに向かって、ためらいなく突き入れられる。
「ひぁ……ぁあああああっっ!!♡」
触手は狭隘な処女膣を無理やりこじ開け、その最奥までを一気に貫いた。
熱い。太い。異形の肉が、未経験の膣壁を容赦なく擦り上げる。
逃げ場のない密室で、身体の内側を蹂躙される異物感が、脳髄を揺さぶった。



「あ、ああ……たす、助け……ッ！」

必死に声を上げるが、希望の象徴であるはずの轟音が、私の声を無慈悲にかき消していく。

痛みと、抗いがたい熱の律動。全身が電撃に打たれたようにビクビク痙攣し、腰が勝手にくねくねと揺れはじめてしまうのを止められない。

主動力の轟音に紛れ、誰にも届かない私の嬌声だけが、虚しくこだまし続けていた――。

四

統合歴４１２年　４月27日　09：42　オーレクト海域遭遇戦
第七機動部隊所属　魔装機ヴィクトール００２号機
一番コアシリンダー　暁琉（あかる）－ＲＦ06

【警告。三番コアシリンダー：精神汚染レベル上昇。生理反応ログより性的絶頂を検出。淫魔種の浸食を受けていると推察されます。浸食抑制のため、三番コアシリンダーのイジェクトを推奨――】

「っ……！」

思考が停止した。

――耳の奥に響くＭＥＬ（メル）の冷たい声。

それは、あの時と同じだった。

二年前、エリーリの最期を告げた、あの非情な通告とまったく同じ調子で。

嫌な汗が背筋を流れる。震えが止まらない。視界の片隅、警告ログの赤が滲む。

『そんな……エルミナが……』

ナツの声が震えている。通信機越しでも、その絶望が伝わってくる。

『……な、なっちゃん……』

不意に、途切れ途切れの、熱に浮いたような声が割り込んだ。

『わたし……は……だい、じょぶ……だから……なか、ないで……っ』

それは明らかに大丈夫ではない声だった。言葉の端々に、押し殺したような吐息と、粘ついた水音が混じっている。

いつか見た光景に目頭が熱くなる。だけど、感傷に浸る暇すらない。

主動力は再起動された。その魔力反応は熱源として、周囲に拡散している。

まもなく、この機体はヤツらに捕捉されるだろう。
【軍務規定に従い、三番コアシリンダーの強制イジェクトシークエンスを――】
『待って……お願い……！　まだ……エルミナは……！』
ナツの懇願。その声が、二年前の無力な私と重なる。
だから、
「――うるさい!!」
怒鳴りつけた。
それはナツへの言葉じゃない。あの日の私へ向けた言葉だった。
「もう誰も……誰も見捨てない！　絶対に、三人で帰るわよ……!!」
ずっと、あの日を後悔していた。
あの日、私の手から零れ落ちてしまった、大切な仲間たち。
今度は、絶対に同じことを繰り返さない。

最後まで決して諦めない。

その決意を込めて、私は言葉を吐き出していた。

通信機が一瞬、沈黙する。

やがて、ナツが苦々しく舌打ちをしながら言った。

『……ふん、そんなの当然よ。……でも、ほんとに三人で戻れたら……少しだけ、あんたを認めてあげる』

胸が熱くなる。彼女のその強がりが、何よりも信頼の証に思えた。

「……上等」静かに返す。

息を整え、視線をコンソールに戻す。

ログには、主動力の安定稼働が記録されていく。

放たれた魔力波が、まるで信号のように海中を走り、ヤツらの感知網を刺激する声となったのだろう。

【警告。外部魔力濃度上昇。高速接近する複数の反応を検出。全方位からの敵性反応、接触まで――およそ 40 秒】

外部モニターに切り替わり、その光量が落ちる。

濁流のような瘴気に紛れて、蠢くヤツらの影――淫魔種だ。

「ＭＥＬ、一番コアフルコネクト。私がやる」

【確認。精神リンク開始。警告：レッドゾーンを突破。フィードバックによる精神汚染の危険性が極めて――】

「知ってるわよ、黙ってやって！」

【了解。安全確認をスキップ。一番コアシリンダー・フルコネクト】

その声を最後に、意識が切り替わる。

感覚が、身体を離れ、機体そのものに拡張されていく。

圧力、魔力の流れ、外殻を打つ水の重さ――すべてが自分の皮膚になる。

液状化した瘴気が纏わりつき、皮膚を焼くように神経を蝕む。
ゾワリと脊髄を這い上がるような嫌悪感。
「ナツ、エルミナ。ここから先は、二人の力が要るわ。……サポートをお願い」
『わかってるわよ。任せなさい』
『……はいっ』
通信にナツの短い息が乗り。次いで、エルミナのか細い声。
この声を聞くだけで、命を懸ける価値があると思えた。

そして私は、跳躍する。
視界を埋め尽くす淫魔種の群れ。
獣のように這い寄る触手、棘、粘液の海。
数えるのも馬鹿らしいほどの敵影。

でも、私は怯まない。

「魔力抑制（リミッター）、解放――全部相手してやる!!」

私の咆哮が、機体を通じて深海を震わせた。

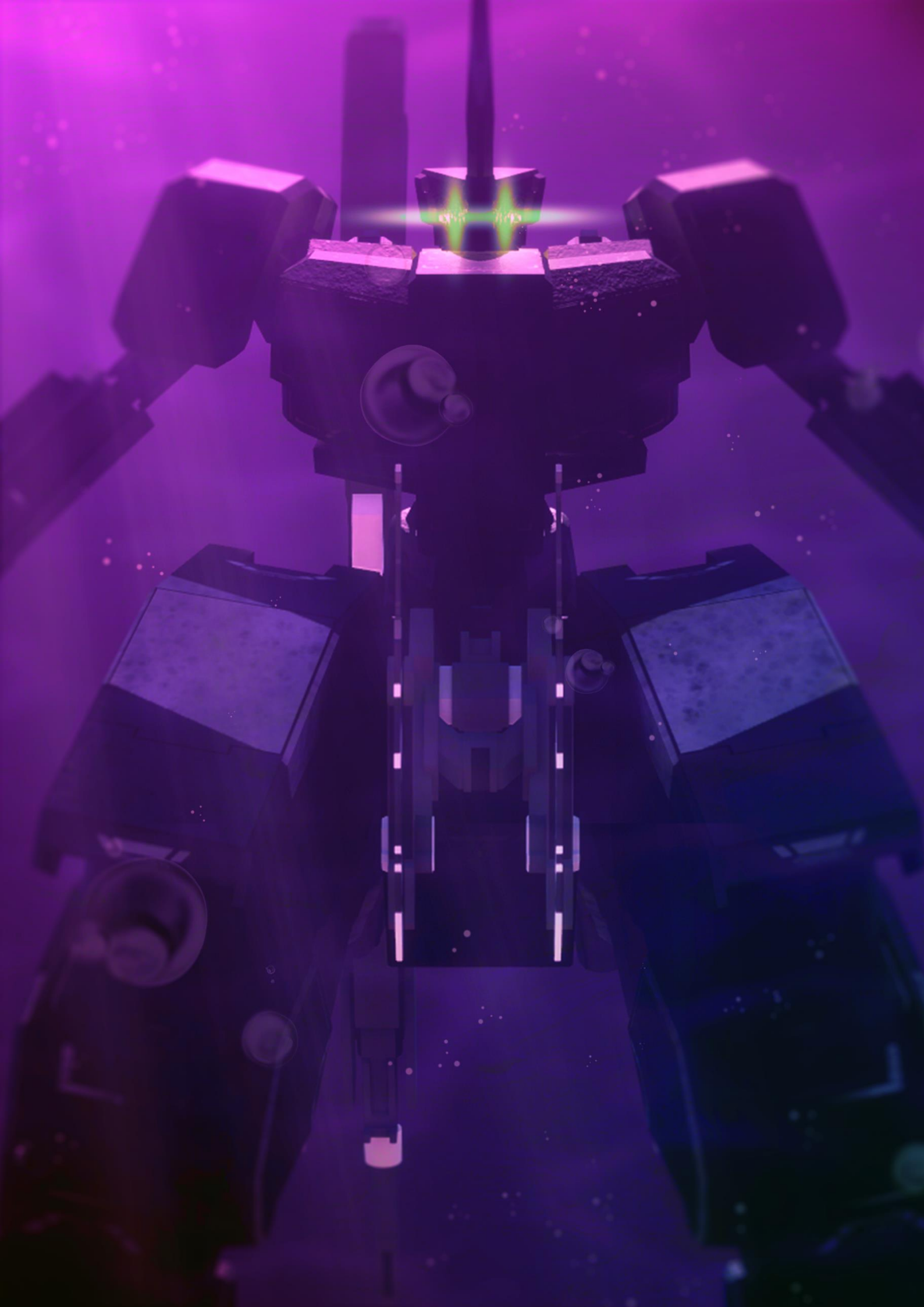
触手が押し寄せる。

斬って。弾いて。薙ぎ払う。

この痛みも、熱も、鼓動も――すべてが、今の私の力。

三人で帰る。

もう二度と、誰も手放さない。



山田さんは負けてない

一・山田さんは魔法少女

あの日、僕が見てしまったものを、誰にも話せないでいる。

話したところで、誰が信じるだろう。僕のクラスメイト、いつも窓の外をぼんやり眺めている山田さんが、実は魔法少女だなんて。

＊

事の起こりは、本当にただの偶然だった。

学習塾の帰り道、僕は急いでいた。今夜は【超新星ブレイザー】の放送日。主人公が光の剣を天に掲げ、「ライズソード！」と叫んで敵を一刀両断にする――あの必殺技を、リアルタイムで見逃すわけにはいかない。

友達から聞いた近道――目抜き通りを外れた薄暗い路地。普段なら絶対に通らない道だ。でも、あと十五分で放送開始。僕は迷わず、その路地へ足を踏み入れた。

「おい、そこのガキ」

粘つくような声に、背筋が凍る。

気づけば三人の男に囲まれ、ひやりとした壁際に追い詰められていた。一人が僕の胸ぐらを掴む。カバンが地面に落ち、テキストが散らばる。ビニール袋から転がり出たトマトが、薄暗い路地を転がっていった。

「サイフは？　現金持ってねえのかよ、このモヤシが」

拾おうと伸ばした手を、汚れたスニーカーが容赦なく踏みつける。
「痛ッ……や、やめて――」

その時、一陣の風が路地を駆け抜けた。
ふわりと届いたのは、シャンプーの香り。反射的に顔を上げると、路地の入り口に見慣れた制服姿の少女が立っていた。
山田きいろさん。
いつも授業中、ノートの端に不思議な生き物を描いている、幽霊みたいなクラスメイト。その虚ろな瞳が、まっすぐにこちらを見ている。
「あんだコラ、このアマ」
不良の一人が唾を吐き捨てる。でも、山田さんは動じない。まるで映画のワンシーンを眺めるように、静かに僕たちを見つめていた。

そして――その唇から、小さく言葉が零れた。

「――変身」

世界の色が変わった。

山田さんのカバンから溢れた閃光が、その手の中で鈍色のステッキに変わる。先端の宝石から放たれる虹色の光が、少女の身体を包み込んでいく。

制服が光の粒子に塗り替えられ、黒髪は黄金色に。白い装甲とフリル、リボンをあしらった戦闘服へと変わっていく。

神々しく、美しい――魔法少女への変身。

「な、なんだ……!?」

不良たちが後ずさる。僕も、目の前の奇跡に言葉を失っていた。

けれど。

その輝きは、唐突にかき消えた。

後には、呆然とする不良たちと、いつもの制服姿に戻った山田さんだけが残された。その手には、光を失ったステッキが、力なく握られている。

「……あれ？」

山田さんが、こてんと首を傾げた。

「どうして……？」

二．山田先輩は困った人

「三度目……!?」

モニターに表示された魔力波形が、蝋燭の炎が消えるように失せていく。

私は内線電話の受話器を掴んだ。冷却ファンの低い唸りだけが響く管制室に、自分の声が木霊する。

「第三セクター、桜木町エリア。【マギウス：イエロー】の魔力反応をロスト！　魔物出現の可能性あり、バックアップを要請します！」

『了解。アルファ部隊を派遣する。到着は十五分後』

「はい！」

通信を切り、額の汗を手の甲で拭う。

山田先輩――本当に、困った人だ。

【マギウス】には一日の魔力使用量に上限がある。どれだけ才能があっても、誰もが同じ量で打ち止めになる。そのルールが一番重くのしかかるのが、山田先輩。規格外の魔力を持つせいで、コントロールが大雑把なのだ。本人は普通に戦っているつもりでも、無意識に膨大な魔力を垂れ流してしまう。

燃費が、とてつもなく悪い。

全力戦闘なら一度で限界に達する先輩が、今日は既に二度も戦っている。残りはもう、ほとんど空のはず。

なのに、三度目のアクティベート。

しかも反応は即座にロスト――変身すら完了していない。

「無事で、いて……」

指がコンソールを叩く。街中の監視カメラ映像が次々と切り替わる。大通り、商店街、駐車場――。

でも、魔力反応があった路地裏を映すカメラはない。

「くっ……視界さえ捉えられれば……！」

その時、端末スキャンに引っかかった微弱な映像信号。

プライベート回線――誰かのスマートフォン？

迷っている暇はなかった。緊急権限を行使し、映像ストリームに割り込む。違法性は後で始末書を書けばいい。今は、先輩の安否が最優先だ。

ノイズ混じりの画面が開く。

激しく揺れる映像。その中に映っていたのは――

ガラの悪い男たちに囲まれ、俯く山田先輩の姿。

血の気が引いた。

三．山田きいろは俺の玩具

「しっかり動画撮っとけよ、モヤシ！」

俺はモヤシ野郎のポケットからスマホを奪い、震える手に押し付ける。

「ククッ……震えてんじゃねえよ、ブレるだろ」

跪くメスガキの前にしゃがみ込み、顎を掴んで顔を上げさせる。虚ろな瞳が、ぼんやりと俺を映していた。

子分の一人が、わざとらしい猫なで声で言う。

「どうしたんだい、お嬢ちゃん？　正義の味方ごっこはもう終わりかな？」

「魔法のステッキは電池切れかぁ？　マジウケる」

下品な笑い声が響く。

俺はメスガキの耳元で囁いてやった。

「その安物の棒っきれと、俺らのとどっちがスゲェか試してやるよ」

子分どもが腹を抱えて笑う。

「オラ、口開けるんだよ」

俺は熱く滾った肉棒を、その小さな唇に押し付けた。ガキのくせに、その唇は吸い付くように柔らかく、ねっとりとした熱を帯びている。まるで手練れの娼婦みてえに、俺の巨根をたやすく飲み込んでいきやがった。

「んぐっ……ふぅ……！」

「おいおい……随分、素直じゃねえか」

俺は一度浅く肉棒を引き抜き、その先端をメスガキの唇に押し当てる。

「舌を出せ。もっと丁寧にしゃぶれや」

俺が低く命令すると、言われた通り小さな舌が這い出てきて、亀頭をねっとりと舐め上げる。抵抗も躊躇もない。ただ従順に、舌が竿の先端を何度も往復する。

ガキのなりして、その舌使いは、男を喜ばせるツボを心得ているらしい。

「ククッ……まさか、調教済みの雌犬だったとはなぁ」

俺は再びメスガキの頭を掴むと、根元まで一気に飲み込ませ、欲望のままに腰を突き上げた。ゴプン、ゴプン、と生々しい音が鳴る。肉棒が喉奥の柔らかい粘膜を抉る感触に、快感が背筋を駆け上がってくる。

「おらっ！　全部飲めよ、雌犬……！」

俺は獣のように吼え、メスガキの喉奥で熱い白濁をぶちまけた。射精に合わせてピクン、ピクンと痙攣する小さな喉が、精液を余すことなく受け入れていく。

ずるり、と肉棒を抜き去ると、咳き込むメスガキを子分共の方へ突き飛ばす。

「なあ、雌犬。次はこいつらの世話してくれや」

待ちきれなかった子分共が、汚い笑い声をあげてメスガキに群がっていく。ある者はその口に、ある者は小さな手の平に、己の欲望を叩きつけていった。



「……ぷはっ」

最後の男のそれを飲み干し、メスガキがようやく顔を上げる。その口元は、俺たちの精液でぬらぬらと光っていた。

子分共が全員終わったのを見届けて、俺は再びメスガキの前に立った。男たちの精液で汚され、ぐったりと横たわる姿は、最高にそそる眺めだ。

俺は満足げに鼻を鳴らし、メスガキの細い腕を掴んで仰向けに引き倒した。その小さな身体にゆっくりと跨がる。

「ククッ……準備運動も終わったことだし、そろそろ本番といこうぜ、なあ雌犬？」

俺はスカートを乱暴にまくり上げ、色気のねぇショーツを剥ぎ取ると、まだ幼さの残る秘裂を露わにする。

「そんなにチンポが好きならよ、今度はこっちで味あわせてやるよ！」

白く滑らかな太ももをこじ開け、一度射精して粘液に光る俺の肉棒を、その湿った

入り口に押し当てた、次の瞬間――

それまで死んだ魚のようだったメスガキの瞳に、初めて明確な意志の光が宿った。俺の目を真っ直ぐに見据え、再びあの言葉を口にする。

「――変身」

――またあのオモチャか、懲りねえヤツだ。

そう思った瞬間、メスガキの身体が淡い光に包まれた。

カオティックノベルズ

発　　行	2026年 02月 21日
著　　者	Chaos Gate（KWT）
イラスト素材	ライセンス情報に別途記載
表題フォント	ナイショ文字
本文フォント	源暎こぶり明朝
お 問 合 せ	kwt@kaosu.jp

本書の無断転載・複製・Web上へのアップロードを禁じます。
本作は成人向け作品です。１８歳未満の購入・閲覧はできません。